

# prologue



## プロローグ

古今東西、お姫様は一目惚れ<sup>ぱ</sup>が多すぎるとと思つ。

シンデレラも白雪姫も人魚姫も親指姫も眠れる森の美女も、果てはジュリエットに至るまで、有名なお姫様の多くが初対面で恋に落ちてゐる。

いきなり惚れて、完全に胸を撃ち抜かれて、『これは運命の出会いだわ！』みたいなノリで盛り上がり、交際期間なんかゼロで相手のプロポーズを受け入れちゃう。なんだよ、結局顔が全てなのか？ それとも王子様という立場か？ 金と権力を持つ美形が最強つてオチなのかそなうなのか？

お姫様だけではない。

王子様だつて大概だ。

顔見ただけで惚れて、『おお、なんと美しい娘だ、私の妻としよう』みたいなテンションで盛り上がり、交際期間なんかゼロで相手にプロポーズしちゃう。中には相手の寝顔を見ただけで惚れる猛者<sup>もさ</sup>もいる。やれやれ、所詮女<sup>しょせん</sup>も顔つてことかよ。顔と若さが女の全てつてオチなのかそなうなのか？

とにもかくにも、金体的にスピード婚だ。超速攻でゴーリンして、その後二人はいつまでも幸せに暮らしましたとさ、なんて締めの文句で終わる。バッドエンドのロミジュリにしたつて、全体を通して二週間ちよいというかなりの巻き展開。現代のハーレムラブコメの中には『なぜヒロインが主人公に惚れたのかわからない』なんて叩かれる作品もあるけれど、個人的に言わせてもらえば、その手の突っ込みはむしろ古典文学の方に入るべきだろう。

わかんねえ。

お姫様が、王子様が、なんで相手に惚れたのかわかんねえ。

『一目惚れ』という、最高の便利な言い訳で全てを片付けてんじやねえよ。

まあ。

そんな風にひねくれた指摘をして悦に浸っていたのが、彼女と出会う前の俺だった。

今となつては——実際に『一目惚れ』を経験してしまつた今となつては、考えが一八〇度変わつた。手のひらクルクルだ。一目惚れは実在する。古今東西のお姫様や王子様にも、今ならば感情移入できる。イギリスの推理作家が言つたらしい『一目惚れ以外は恋愛ではない』という暴言めいた名言にも、ちょっとばかし納得しそうになつてしまふ。

あの日、あの瞬間で、俺は一目惚れをした。

いや。

あるいは——一目惚れだつたことにしたいのかもしれない。

惚れてしまつたからこそ、一目惚れだつたことにしたい。好きになつたからこそ、最初の出会いが特別なものだつたと思い込みたい。運命のよくなもの感じていていい。一人のなにもかもを神聖視してしまいたい——そんな脳内補正が働いている可能性も否めない。

一目惚れの正体というのは、案外そんなものなのかもしれない。

言つてみれば、恋愛脳が引き起こす自己洗脳。

一目見ただけで惚れるわけではなく、好きになつて惚れてから、『思い返してみれば初めて会つたときから、なんか運命的なものを感じていた気がする』と、後になつてから自分にどう都合のいいように記憶が再構築される。そういう後づけやこじつけのことを、人は『一目惚れ』と、そう呼んでいるのかもしれない。

さて。

照れ隠しの前置きはこれくらいにして、そろそろ本題へと入ろうか。

まずは、俺達の出会いから。

今になつて思い返すと——全ての真相が明らかになつてから思い返すと、笑つてしまつたくなるぐらいに滑稽で奇抜で不思議で、それこそ、お伽噺のよくな出会いだった。

# 第一 章

## 昔々あるところに、 大層綺麗なお姫様がありました。

「……はあ」

月曜日の早朝。

慣れない満員電車の中、俺は小さく溜息をついた。

今の時間帯は通勤通学ラッシュで真ん中。俺の乗る駅からでは、座ることはもちろん、吊革すら掴むこともままならない。まあ、吊革を掴めない程度で文句を言つては、首都圏に住まう人達に笑われてしまうのかもしれないけれど、東北の地方都市に住む俺の感覚としては、電車を座つて乗るもの、だ。

いつもは一本ぐらい早い電車に乗り、座席に座つて優雅な通学タイムを満喫している。月曜日ならば駅前のコンビニでジャンプを買って電車内で読み、そして早く着いた教室でもう一度ゆつくりと、巻末コメントや次週予告までじつくりと読み直すのが、俺のアルティメット・ルーティーン。

しかしそんな習慣は本日、寝坊という大変シンプルな要因で無残に碎け散る。

ぬう。やっぱり漫画なんか読んでないで、早く寝るんだつたな。なんで最近の漫画アプリはどう

れもこれも毎時ジャストに更新するんだよ？ 朝起きてから読んだ方がいいとは頭じゃわかつてはいるんだけど、ついつい夜更かしをしてしまう。

零時更新の漫画アプリのために夜更かしをし、そのせいで寝坊し、ジャンプを読みそびれてテンションが下がる——それが俺、桃田薫、高校一年生の、五月の日常だった。

ジャンプ・ロスと満員電車によつて体力と気力がガンガン削られていく中、電車が一つの駅に停車した。

開いたドアからさらに乗客が入つてきて、俺は車内の奥へ奥へと追いやられてしまう。反対側のドア付近にどうにか自分のスペースを確保した。

そのとき、である。

俺は—— 一人の女子高生に目を奪われた。

「…………」

綺麗と、かわいいが、同時に心を埋め尽くした。

紺のブレザーに身を包んだ彼女は、ドアの窓から外の景色を眺めている。

真っ白な肌と、整つた目鼻立つ。どこか幼さの残る顔立ちながら、長い睫毛や薄く引いたリップが『女』を強く強調する。長く艶やかな黒髪からは清楚な雰囲気が漂うが、今時の女子高生らしく、毛先は軽く遊ばせてあつた。

特有の熱気に満ちた満員電車の中で、彼女だけが淡く涼やかな光を纏つているような、そん

な錯覚さえ見えた。

「……っ」

ハツと我に返り、慌てて視線を外の景色に向ける。やべえ、いくらなんでも見すぎた。でも思わず見惚れてしまうぐらい、綺麗だった。かわいかった。

そして……大きかった。

ブレザーの内側、薄手のニットを押し上げる双丘には、男を一目で狂わす魔力があつた。豊かというか、たわわというか。存在 자체が性犯罪だと訴えたくなるような、恐ろしくも素晴らしい豊乳。ブリーツスカートから伸びる脚は黒いストッキングに包まれ、細すぎず太すぎずという絶妙なバランスを保ち——

つて、いや。

どんだけセクシャルな部分に注目してんだよ、俺。朝っぱらからムラムラし過ぎだろ。にしても……妙だな。

あのブレザーは確かに、桐原女学院の制服だつたはず。ここらじや有名な私立のお嬢様高校だ。けどこの電車は、桐女とは反対方向の駅に向かっている。現に彼女以外、桐女の制服を着ている奴は一人もいない。乗り間違えならどこかで降りているだろうし……となると、なにか忘れ物でもしたのだろうか。

妙な違和感を覚えて、俺は再び彼女を見やる。そう、違和感だ。決して性欲からではない。

電車の揺れに合わせて揺れるたわわな果実を運良く見たいなんて微塵も思つちやいない。

ちらりと、視線だけを横に動かして——そして気づく。

彼女が、真っ青な顔をしていたことに。

体調不良ではない、と直感的に思った。なぜなら彼女はその端正な顔を、恐怖に引きつらせていたから。引き結んだ唇は小さく震え、脇に下がった手はブリーツスカートを、不格好なシワができるほど強く握り締めている。

その理由はすぐにわかつた。

「——っ!？」

痴漢。

俺の目が捉えたのは、リアルタイムで行われる痴漢の光景だった。

女子高生の臀部を、混雑に紛れて馴れ馴れしく撫でる手。

その手は、彼女の背後に立つ男から伸びている。眼鏡をかけたサラリーマン風の男。一見すると真面目そうな風体で、とても性犯罪をする奴には見えない。しかし手つきは淀みなく、顔は平静そのもの。もう片方の手ではスマホを操作する隠蔽工作。

おいおい、マジかよ……。

朝っぱらからなにやつてんだ。

ああ、いや、痴漢って意外と朝が多いんだつけ？ 無抵抗の美少女に卑劣な魔手が迫る光景。腹の底から義憤にも似た思いが湧き上がるが、しかし初めて遭遇した異常なシチュに、頭の方がパニクつてしまふ。

ど、どうしよ……？

見てしまった以上無視はできない。なにより彼女をこれ以上放ってはおけない。助けたい。でも、どうすれば……。ここで下手な騒ぎを起こしても彼女のためにならないかもしれない。きちんと犯罪として立証するためには、冷静に証拠写真でも撮った方がいいのか——などと必死に考えていたとき。

彼女がこちらを見た。

目が合う。

涙に潤む瞳に見つめられた瞬間——あらゆる計算が頭から消えた。

考えるより先に体が動く。

「——おいっ！」

強引に人混みを搔き分けて足を踏み出し、サラリーマン風の男の手を掴んだ。「ひつ、なつ」と悲鳴にも似た声が男の口から上がる。

「なにやつてんだよ、てめえ」

恐怖を必死に押し殺し、できる限り凄んでみせる。本当はかなり怖い。相手がいきなり逆上

幸いなことに相手の男は華奢で、俺よりも背が低かつた。 「な、なんだ、きみは？ いきなり、なにをするんだ……？」

「とほけんじやねえよ。てめえ、さつきからずっと——」

本当に俺は皆勧賞を目指している真面目な優等生（帰宅部）なのだけれど、相手を威圧するため、必死に不良っぽい演技をしてみせる。 グツ、と相手の腕を荒々しく掴み上げる。

幸いなことに相手の男は華奢で、俺よりも背が低かつた。

「な、なんだ、きみは？ いきなり、なにをするんだ……？」

「とほけんじやねえよ。てめえ、さつきからずっと——」そこでふと、彼女の顔が目に入った。恐怖と驚愕に歪んだ、今にも泣き出しそうな顔。ああ、やつてしまつた。安易に行動すべきじゃなかつた。

俺が騒ぎ立ててしまつたせいで、周囲から奇異の視線が集まつてゐる。「なになに？」「痴漢だつてさ」「痴漢！」「マジで！」「ウケるんだけど」「誰？」誰がやつたの？「勘違いじゃねえの？」最近、痴漢の冤罪増えるらしいし「自意識過剰な女つてやだねー」興味本位の視線と声が車両内で大氾濫。スマホのカメラを向けてくる奴までいる。これじや痴漢を捕まえたところで、彼女も一緒に晒し者になつてしまふ。

必死に考え抜いた末に俺は、 「——ず、ずっと、俺のケツを触つてたじやねえかよ！」

と叫んだ。

加害者である男も、被害者の彼女も、ボカンとした。

周囲にも変な空気が流れ、やがて失笑めいた笑いが漏れる。「え、嘘うそ。男が痴漢されたの?」「それって痴漢じゃなくて痴女ぢやね?」「いや、男が男に触つたみたいだよ」「ウケるんだけど」「まあ恋愛は自由だし」猛烈な羞恥しうちがこみ上げてくる。

けど、今更後に引くわけにはいかない!

押し通せ!

「ま、まつたく……朝つぱらから盛つてんじやねえよ。いくら俺のケツが、つい触りたくなるぐらいキューートだつたからってさ!」

「な、なにを言つてるんだ……? 私は男になんか——いたつ」

腕を強く掴み反論を止める。いやいや頼むよサラリーマン風のおつさん! 頼むから話合わせろ! あんただつて痴漢で訴えられるよつか、スキンシップが激しいおつさんと勘違いされる方がまだマシだろ! 事を荒立てたくねえんだよ! 見逃してやるから差し読みでくれマジで! そんな俺の必死のアイコンタクトが通じたのか……はたまた、必死過ぎる形相にビビったのか、相手の男は完全に沈黙してしまう。

「ふんっ。二度とすんじやねえぞ!」

強く言い切り、俺は元の位置に戻つて窓の外を睨む。……後ろを見る勇気はない。ザワザワ、

ザワザワ。あーあ、みんなが俺の話をしてるよお。

電車が次の駅に止まるとき、加害者の男は逃げるよう電車から降りた。けど、残念ながらまだ俺の降りる駅ではない。メチャクチャ降りたいけど、ここで降りたら遅刻確定なので皆勧貢のため耐える。

相手がいなくなつたせいで、周囲の興味は俺に集中する。次から次へと伝言ゲームが繰り返され、いつしか「あいつあいつ、なんか、あの男子が痴漢をしたみたい」とか言つちやう奴まで現れる始末だ。衆愚つて怖いねー……。

結局、降りる駅に到着するまでの十分間、俺は無責任な興味の集中砲火を食らうハメとなる。下世話なヒソヒソ話には心底辟易(べきえき)したけれど——でも、彼女が痴漢に遭つたことには誰も気づいていないようで、それだけはよかつたと思つた。

終点の駅に到着した後、俺は逃げるよう電車を降り、改札を小走りで抜けた。

はあ。噂(うわ)になつたらどうしよう?

さつきの車両には同じ学校の奴も結構乗つていた気がする。常識ないバカが俺の写真をインスタに上げてたりして……あー、終わつたかもなあ、俺の高校生活。

憂鬱(ううつ)に押し潰されそつになりながら、歩く速度を緩めたとき、

「——ま、待つて！ 待つてください——！」

背後から声をかけられた。足を止めて振り返ると、さつき痴漢の被害に遭っていた女子高生が走つてくるところだった。

「はあ、はあ、よ、よかつた……間に合つた」

彼女は両手を膝につき、呼吸を整える。前かがみになつたせいで、意識したわけではないのだろうけど、豊かな胸部が一層強調される形になつた。

やべえな。改めて正面から見ると、本当にデカいし……本当にかわいい。

髪はサラサラで目鼻立ちもくつきり。化粧も、いわゆるナチュラルメイクというやつなんだろ、変に濃すぎたりすることもなく、実に自然な美しさに仕上がっている。制服は全体的にややサイズが小さいようで、それがまた彼女の肉感的な体型を強調する。

美少女といつても、学校にいるただ見た目が綺麗な少女とは少し違う気がした。色気というのかなんというのか……とにかく、そこら辺の女子高生には出せない、どこか大人びた雰囲気を感じる。

「あ、あのっ、さつきは本当にありがとうございました！」

息を整えた後、彼女は深々と頭を下げた。

「私……本当に、怖くて怖くて……どうしたらいいか、わからなくなっちゃつて。きみのおかげで本当に助かつた。ありがとう。あと……迷惑をかけてしまつて、ごめんなさい」



「いや、べ、別に……」

言い淀む俺。

あんまり丁寧にお礼や謝罪を言われてしまふと、こちらも恐縮してしまう。

「大したこと、してないっスよ。つーか……俺の方こそ、すみません。本当はあの男のこと、

車掌が駕貞さんに突き出した方がよかつたと思うんですけど」

本来はそうすべきなのだろう。罪に正しい罰を与えるためには——痴漢に正しい社会的制

裁を与えるためには、罪を明らかにして法で裁かせるべきなのだ。

けれど俺は、俺の勝手な判断で、奴の罪を誣魔化してしまつた。

「そんなつ。謝らないでよつ！」

俺の謝罪を、彼女は強い声で否定した。

「私が恥をかかないように、自分が被害に遭つたことにしてくれたんだよね？」

「……まあ」

「ごめんね。私のせいで、恥ずかしい思いさせちゃつて」

「き、気にしないでください。俺が勝手にやつたことだから」

「……ありがとう。きみに助けてもらえて、本当によかつた」

潤んだ目を細めて、朗らかに微笑む。

俺は照れくさくなつて、つい顔を逸らしてしまう。

「あつ。大変、もうこんな時間つ」

駅ビルの外壁にある時計を見て、彼女が慌てた様子で叫ぶ。時刻はすでに八時を回つてゐる。

これからお互い、それぞれの学校に向かわなければならぬ。

彼女とは、ここで別れたらたぶんもうこれつきり—— そう思つた瞬間、どうしようもない喪失感に襲われた。

もっと話がしたい。また会いたい。そう思つてしまふ俺がいる。

ど、どうしよう……。

これは、連絡先とか聞いちゃつていい流れなのか？ いやでも迷惑かもしれないし、てかこのタイミングで聞いたら、『痴漢から助けてやつたんだから連絡先ぐらい教えろよ』と恩に着せてるみたいだよな。たゞえ内心じや嫌がつても負い目から教えてくれそうで、だからこそ聞きづらい……いやでもやっぱり——

「あ、あのつ」

などと、考え過ぎるぐらい考え過ぎてしまい、俺が一步を踏み出せずにいると、

緊張で裏返つたような声で、彼女が口を開いた。

見れば、色白だった頬が真っ赤に染まつてゐる。

「よ、よかつたら……連絡先、教えてもらえないかな……？」

後半はボソボソと消え入るような声。俺は目をパチクリさせてしまつ。

「えっと……その、今日のこと、また改めて、ちゃんとお礼がしたいから……。ダ、ダメなら全然大丈夫だけど」

「ダ、ダメじゃないです！ 喜んで教えます！」

お互いにスマホを取り出し、ラインIDを交換する。

「桃田薰、くんでいいのかな？」

連絡先の交換が終わった後、彼女がスマホの画面を見ながら呟いた。「はい」と頷いて俺もまた、自分の画面を見る。どうやら彼女も俺と同じく、本名でラインを使っているタイプのようだった。

ようやく彼女の名前を知ることができた。

「織原、姫、さんですか？」

「いや」

「……はい」

確認すると彼女——織原さんは恥ずかしそうに頷いた。

「あ、あははー。な、なんか恥ずかしいよね、姫だなんてさ。小さい頃ならかわいい名前なんだろうけど、この年になるともう——」

「いや」

俺は言う。

自分でも、どうしてこんな白詞を言つてしまつたのかは、わからない。

「びつたりだと思います……よ」

「……そ、そ、そんな、やだっ。もう、なに言つて……うう」

織原さんの顔がみるみる赤くなつていく。俺もきっと似たような顔色になつてるんだろう。恥ずかしくて照れくさくて、どうにかなつてしまいそうだった。

「……あ、ありがと、桃田くん」

ぱつりとそう言つて、織原さんは嬉しそうに恥ずかしそうに微笑む。その笑顔があまりにも眩しくて、俺は胸が締め付けられるように痛んだ。

痛みの正体は、まだわからなかつた。



「……好きな女ができた？ ちつ。死ねばいいのに」  
友人である浦野泉の反応は、予想取り辛辣だった。

昼休み。

俺はいつものように空き教室の一つで、ウラと一人で昼食を食べていた。俺達の他には誰いない。高校に入つて一ヶ月。昼休みの教室は、リア充というのかパリピというのか、とにかく社交的で賑やかな連中の空間と成り果ててている。

俺はどうにもそういった空気には馴染めず、校舎の端つこの方にある空き教室までわざわざやつてきて、気の置けない友人と昼食を取ることにしていた。

「す、好きだなんて言つてねえだろ。ただ……気になるつつーか、なんつーか。あくまで、好きになつたかもしれないという可能性の話をしてるだけであつて……」

「キメえな。デカい団体してるくせに女々しいこと言うなよ。この、裏切り者が」

「裏切り者つて……意味わかんねえな。なにが裏切りなんだよ?」

「モモだけは僕を裏切らないと思つてたのに……」

長い前髪から覗く目に、呪いと憎しみの感情を滾らせるウラ。

「青春だの恋愛だのという欺瞞に満ち満ちた幻想に騙されることなく、共に気高き陰キヤ道を歩んでいけると思つていたのに」

「……なんだよ、陰キヤ道つて」

「思い出せよ、モモ。中学時代、クリスマスやバレンタインといったクソみてえなイベントの日には、いつも僕と一緒に世界を呪つただろ? 企業戦略に踊らされる頭の足りないバカ共を嘲笑の的として、一緒に美味しい酒を飲んだだろ?」

「やめろ、ウラ。黒歴史を掘り起こすな。俺はもう、そういうのは中学で卒業したんだよ。高校じゃ普通に彼女とか作りてえんだ」

そして酒は飲んでない。飲んだのはシャンメリード。男二人で世界を呪いながらシャンメリード。

浦野泉。

リーケ飲むようなクリスマスは、もうたくさんなんだよ、俺は。

「けつ。所詮はお前も、恋愛とかいう愚かな価値観に溺れる凡愚の一人かよ。モモなんか嫌いだ。あつち行け、バーカ。性病で死んじやえ」

ウラは拗ねたように顔を背け、野菜ジュースから伸びるストローに口をつけた。俺は溜息をつく他ない。

あと一人の男を加えて、三人でツルむことが多かつた。

ウラこと浦野泉は、小さい頃は割と快活で明るくて、クラスのリーダー的存在になるような子供だったんだけど、天国のように地獄だった中学時代を経て、このような陰キヤの中の陰キヤと成り果ててしまった。

「だいたい、なんだよ、電車で痴漢に遭つてたどこ助けるつてさ。漫画かよ」

「しようがねえだろ。実際そんな事態に遭遇しまったんだから」

「ふん。どうせその桐女の女子も、偏差値の低さと比例するような短い丈のスカート穿いて、

女をアピールしてたんだろ？ ヤリマンだよ、ヤリマン。ビッチ確定。男を誘うような格好してるから痴漢なんかに遭つて——』

「おい』

自分でも驚くぐらい、低い声が出てしまった。織原さんを悪く言われたことで、苛立ちにも似た感情を抱いてしまっている俺がいた。たぶん、睨むよにしてしまったのだろう。ウラは「ひいっ」と間抜けな声を上げ、椅子から転げ落ちそうになっていた。

「な、なんだよお……は、暴力か？！ 暴力に訴えるのか？！ 手を出すってことは、口では僕に勝てないと認めたってことだからな！ はい、僕の勝ち！ 論破！ 論破！」

「……落ち着けって。なんもしねえから』

基本的に死ぬほど気が弱いんだよなあ、こいつ。親しい奴にはすぐえ口悪くて横柄な態度に出てるけど、本当は気が小さくて人見知り。クラスでもいつも一人で、所在なさげにポツンと佇んでいる。隣のクラスの俺が遊びに行くと、「な、なにしに来たんだよ、この野郎っ」と二コニコしながらダッシャで寄つてくる。まあ、かわいい奴なのだ。

「……で、どうすんだよ、モモ』

落ち着きを取り戻したウラが、椅子に座り直して問うてくる。

「その女と……付き合うのか？」

「いや、気が早えよ。まだ連絡先交換しただけだから』

「んじや、どうすんだよ？」

「だから……それをお前に相談してるんじやねえか」

運よく連絡先は手に入れることはできた。しかし……恋愛経験の乏しい俺にはここからどうしたらいいか、全くわからない。こつちからすぐに連絡を取るべきなのか、それとも相手からの連絡を待つべきなのか。

「なるほど。じゃあ一つ、いいアドバイスをやろう——相談する相手を間違つてている」「わかってるわ、んなこと」

「なるほど。じやあ一つ、いいアドバイスをやろう——相談する相手を間違つている」「俺と同じ……いや、俺以上に死んだ学生生活を歩んできたこいつに、恋愛の駆け引きや機微などは一切わからないだろう。恋愛経験なんて二次元でしか積んでない奴だからな。

「この手の相談は、僕じゃなくてカナの奴にしろよ」

「まあ、俺もそう思つたんだけど……あいつに相談したら、すぐえ高い次元でのアドバイスをしてきそうじやん？」

「んー、確かに。『え？ 普通に連絡すればいいんじやない？ 普通に』とか言いそ？」

「だからひとまず、底辺のお前に話を聞いてもらおうかと思つて」

「あー、なるほどねえ……って誰が底辺だコラ」

軽くツッコんでから、ウラは思案顔となる。

「あー、ん……よくわかんねえけど、待つてたらいんじやねえの？ 一応、モモが恩人で、

あつちがお礼するつて言つてたんだろ？ だつたらきつと、向こうのタイミングで連絡が来んだろ？」

「そ、そんなんだけど……やつぱここういうときは、こつちから連絡する方が男らしいような気もするだろ？ ひとまず、先に挨拶ぐらいはしておいた方がいいかなって」

「んじや、そうすれば」

「だ、だけど……がつついてるようになるのも嫌でさ。痴漢から助けたことを利用してマウント取るような真似だけは絶対したくなくつて……」

「……クソ面倒くせえな。これが童貞という生き物か」

唾棄するように言いやがつた。いやお前も童貞だろが。中二か中三のクリスマスに、生

涯童貞同盟」とかいう、アホみたいな同盟組んで一人で盛り上がり上がつただろ。

「つたく、連絡先が交換できたらいで舞い上がりすぎなんだよ、モモは。相手の女は、たぶん今頃急に冷めてるこだよ。『はあーあ、一応、社交辞令でお礼するとか言つちゃつたけど、やつぱメンンドいなあ。もう放置しちゃお』とか、そんな風に思つて——」

と、そこで。

テーブルの上に置いておいた俺のスマホがブルブルと震えた。ラインの着信を知らせる振動

だ。シユバツ、とひつたくるような動きでスマホを取る俺。

メッセージの送り主には——織原姫と表示されていた。

と、

『こんにちは。昼食時に失礼します』という、女子高生とは思えないほど堅い挨拶に始まり、再度丁寧に朝のお礼を述べられた後——本題が始まつた。

『今朝のお礼をしたいので、もしよければ明日の放課後、会つてもらえますか？』

その文章を読んだ俺は、きっと大層気持ち悪い顔となつていたことだろ。横にいたウラが心底不機嫌そうな顔になつて舌打ちし、「……死ねばいいのに」と呟いた。

翌日の放課後。

待ち合わせ場所は、向こうの希望で駅ビル前の広場となつた。

俺は遅れてはならないと三十分前に到着し、夕暮れに染まる街並みの中、行き交う人々を眺めながら相手の到着を待つ。

……情けないぐらいにそわそわしてしまう。ポケットから無駄に何度もスマホを出し入れしたり、駅ビル入り口のガラス扉を鏡にして身だしなみや髪型を直したり。あー、クソ。髪型が全然決まらん。美容院にでも行つとくんだつたかな。やがて二十五分後、つまり待ち合わせ時間の五分前に、織原さんは現れた。

昨日と同じ、桐女のブレザー姿。俺の姿を見かけると小走りでやつてくる。

「ごめん、桃田くん。もしかして待たせちゃった?」

「い、いえ。俺も、今来たとこです」

定番の台詞を言つてみる。本当は結構待つてている。三十分には到着してたし、その前にも本屋やゲーム屋を回つて時間を潰していた。

待ち合わせの時間が五時半という、帰宅部の俺には中途半端な時間だったため、一回帰ることもできず、駅前で適当に時間を潰していた。

「……ごめんね、変な時間に呼び出しちやつて。今日はその……い、委員会とかいろいろあつてさ」

「大丈夫です。気にしないでください」

「うん……」

そこで会話が途切れてしまう。自分のコミュ力のなさが恨めしい。気の利いたトーク一つ出でこない。お互いに言葉を探すような沈黙の後、織原さんが苦笑気味に口を開く。

「あ、あははー……なんか、緊張しちやうね」

「そう、ですね」

「昨日、会つたばっかりだもんね」

「はい……」

「マ、マジ出だねつ」

「……へ?」

グッと親指を立てて言つた織原さんに、俺はポカンとしてしまう。

「え……あ、あれ? ち、違つた? 今時の女子高生は、とりあえずマジ出つていうんじゃないつけ……? なにかにつけてマジ出つて言つとけばコミュニケーションが成立するはずじゃ……あれ? マジ出解だつたつけ……?」

顔を真つ赤にして困惑する織原さん。渾身のギヤグが滑つたかのような、特大の羞恥を感じている様子だった。

「マジ出……ですか。いやまあ、言う奴は言いますけど、俺の周りはあんまり……」

「ああつ、もう忘れて! 今のはなし! 全部なし!」

真つ赤な顔で叫んだ後、織原さんは「んんっ」と失態を誤魔化すように陔払いをし、

「えつと……じゃあ、移動しましようか」と告げた。彼女に連れられて辿り着いたのは、駅から少し歩いたところにある、人気のない

ベンチと砂場があるだけの、寂しい公園だ。

うちの高校のテニス部がたまに壁打ちに来ることもあるそうだけど、日が暮れ始めたこの時  
間帯には、人っ子ひとりいない。

街頭の淡い光に照らされるベンチに、織原さんがスカートを畳みながら腰掛ける。

俺はどの程度間を詰めていいのか考えに考えて、結局、人が一人座れる分ぐらいのスペース  
を空けて座った。

「じゃあ改めて……昨日は、本当にありがとうございました」

「居住まいを正して、織原さんは言う。

「それでね、お礼なんだけど……」

織原さんは持っていたトートバッグから、かわいいデザインの弁当箱を取り出した。

「お、お弁当作つてきちゃいました」

「弁当……ですか」

「め、迷惑、だつたかな？ 嫌だつたら、私が自分で食べるから無理しなくとも……」

「いやつ、メチャクチャ嬉しいです！ ちょうど腹減つてたんで！」

女子の手作り弁当をもらうなんて、人生で初めての経験だ。これで喜ばない男はいないだろ  
う。ああ、まさか俺の人生に、こんな素晴らしいイベントが来ようとは。生きてて本当によ  
かった。

「はあ……よかつたあ、喜んでもらえて」

胸に手を当てて、安堵したように息を吐く織原さん。

「お礼をなににしようか、いろいろ考えたんだけどね。物を渡そうにも、男の子が喜ぶものと  
かよくわかんないし、それに私……ほら、女子高生でお金がないから！ そう、女子高生だから  
らお金がないの！」

早口でまくし立てる。やけにお金がないこと、女子高生であることを強調してきた。

「もう、ほんとに女子高生だから全然お金がなくつてね……」<sup>み</sup>巳年だから、お金には困らないな  
んて言わながら育つたんだけど、全然で

「巳年……？」

「うん、そうだけど……あれ？ 言わない？ 巳年はお金に困らないって。私、お婆ちゃんか  
らよく言われたんだけど」

「それは知つてます。俺も言われたことありますから」

『亥年は猪突猛進』と同じぐらいよく言われる、『巳年は金に困らない』。冷静に考えると突つ  
込みどころ満載な言い伝えだけれど、まあ今は流そう。

「言われた……ってことは」

「はい。俺も巳年です」

「そ、そうだったんだ」

「偶然ですね。ってことは織原さん、タメだつたんですか」

「え……」

「已年なら、俺と同じで、今高一ですよね?」

「……そ、そ、そ、だ、ね。う、ん、そ、う、……そ、う、な、の。そ、んな、氣、が、す、る。私、は、高、一。高、校、一、年、生、の、女、子、高、生、……」

まるで今新設定を覚えたかのよう、不自然な言い回しをしてくる。まあ同じ已年でも、生まれならば一学年上という可能性もあったのだが、どうやらタメで合っていたようだつた。『タメだつたんだ。なんか勝手に先輩だと思つてました。織原さん、大人びた雰囲気があるから――』

「嘘つ!」

唐突に声を荒らげ、顔を近づけてきた。ちょつ。近い。

「や、やつぱり私、老けてる!? JKには見えない!? 無理がある!?」

「え……? いや……」

なにやら切実な様子だった。うーむ。『大人びている』は今時の女子高生には禁句だつたのだろうか。褒め言葉のつもりだつたんだけど。

「ふ、老けてはないですよ。ただ、落ち着いてて礼儀正しいから、大人っぽいと思つてただけで」

「そ、う、……な、ら、い、い、ん、だ、け、ど」

はあー、と心の底から安心したように、深々と息を吐く織原さん。

「……どうしたんですか、急に?」

「な、なんでもないなんでもない。ほら、細かいことは気にしないで、早く食べてよつ」  
焦つた声に促されて、俺は弁当箱を開く。  
目を瞪る。

正方形の箱に詰められていたのは、サンドイッチと唐揚げ、卵焼き、ベーコンのアスパラ巻

き、チートマト。彩り豊かで実に食欲を唆るラインナップだった。

「い、いただきます」

軽く手を合わせてから、俺はまず唐揚げに狙いを定めた。添えてある可愛らしいピンを手に取り、肉の塊に突き刺して口に運ぶ。

「ど、どうかな?」

冷めているのに十分美味い。下味がしつかりと効いているし、衣も水っぽくなつてない。囁か  
む度に肉汁が口の中で躍る。続けてサンドイッチに手を伸ばす。うん、こちらも美味だ。具材  
はハムとチーズとレタスで、パンズにきちんとマーガリンが塗つてある。卵焼きはかなり甘め  
の味付けで、好みがわかれそうだったけど、俺は大好きな味だった。そう、卵焼きは甘めでい  
い。ご飯のおかずにならないぐらい甘くていい。

夢中で食べ続けていた俺に、織原さんが不安そうに聞いてきた。しまつた。美味しいすぎて

ずっと無言で食べ続けてしまった。

「めっちゃ美味しいです」

「ほんと？ よかったあ」

嬉しそうに破顔する織原さん。

「俺、こんな美味しい弁当、初めて食べました。織原さん、すぐえ料理上手ですね」

「や、やだもつ、褒めすぎだよ。このぐらい、普通だつてば。私、一人暮らしは長いからさ。節約のために、毎朝自分で自分のお弁当を作つてるから、嫌でも上達して——」

「一人暮らしは長い……。織原さん、高一ですかね？」

高校入学と同時に一人暮らしするパターンは割とある気がするけど、まさか中学から一人暮らししていたのだろうか。

「あつ。え、えっとね、あのね……わ、私、家庭が複雑だからっ！」

ふむ。そっか。

家庭が複雑なのか。ならば仕方がない。あまり触れない方がいいだろう。

会話をひとまず中斷し、俺は弁当の残りを平らげる。

「ご馳走様でした。本当に、美味しいかったです」

「お粗末様でした。ふふ。なんか、いいね、男の子がモリモリ食べててくれるのって」

織原さんは楽しげに笑つた後、もじもじと両手を絡めた。

「あつ、そんな深い意味じゃなくて！ ただ、そのぐらい美味しいかつたってことで！」

「わ、わかつて、わかつてるから、大丈夫っ！」

お互いにぶんぶんと手を振る。息を整えた後、織原さんは、

「あつ、そんな深い意味じゃなくて！ ただ、そのぐらい美味しいかつたってことで！」  
 ハツと口を噤む。しかし手遅れで、織原さんは頬を赤らめていた。いやいやおいおい、なんていぐらいで——」

「そう、なんですか。なんか……光榮ですね。ほんと、美味しかつたです。もう、毎日食べた

てベタな失言してんだよ俺は！？」

「あつ、そんな深い意味じゃなくて！ ただ、そのぐらい美味しいかつたってことで！」

お互いにぶんぶんと手を振る。息を整えた後、織原さんは、

「ありがと。私も桃田くんみたいな子に、毎日食べてもらえたから嬉しいな」と付け足し、朗らかに微笑んだ。大人びた社交辞令っぽい返しであつたけれど、それでも胸が高鳴ってしまう。

そこでふと、彼女の表情に影が落ちる。

「……自分のためだけにご飯作つてのって、ちょっと寂しいからさ」

はかな  
はかな  
傍げで、どこか自嘲めいた笑み。

すでに日は暮れていた。月の光に照らされ、寂しそうに笑う織原さんは、触れば壊れてしまいそうなほど織細な発亮気を纏ついて—— 矛盾するようだけど、だからこそ思い切り抱き

締めてしまいたくなつた。

駅へと戻る道では、本当に取り留めもない話をした。

「へー、桃田くん、九月生まれなんだ。春っぽい名字なのに」

「名字は関係ないでしょ。名前ならともかく」

「あはは。それはそうか」

「織原さんは十二月ですか。じゃあ、俺の方が少しお兄さんだったんですね」

「う、うん。そ、そ、なるの、かなー……」

本当にどうでもいい話をしながら、並んで歩いて行く。せめてもの男らしさアピールとして、弁当の入ったトートバッグは俺が持つようにした。

「うーむ。けど、アレだな。

なんか……敬語やめるタイミング完全に失ったなあ。

最初、完全に先輩だと思って接してたから、タメだとわかつてもなんか敬語にし辛い。向こうから『タメ口でいいよ』とでも言ってくれればいいのだけれど……なんというか、今の状態でお互いにすごくしつくり来ている感じがある。不思議なものだ。

あつという間に駅へと到着してしまう。

「えと、じゃあ、ここでお別れしようか」

「あの……俺、家まで送つてしまいましょうか? だいぶ暗くなつてるし」

善意からの申し出——というわけではない。心配なのは本当だけれど、一番の理由はもつと彼女と一緒にいたかったからだ。少しでも、一分でも長く——

しかし、織原さんは首を横に振る。

「ありがとう。でも大丈夫。私、家、近いから」

「……そうですか」

「じゃあ、そろそろ」

「はい……あの」

「うん?」

小さく首を傾げた織原さんに、俺は言う。

「ま、まだ今度」

もつといくらでも気の利いた台詞<sup>せりふ</sup>はあつただろう。しかし恋愛経験値が底辺の俺には、ありつけの勇気を振り絞つても、この一言が精一杯だった。

織原さんは一瞬面食らつたような顔をした後、すぐに優しい笑みを浮かべ、

と言つてくれた。胸の奥から言いようのない歓喜がこみ上げてくる。たとえ社交辞令の挨拶

だつたとしても——「ワンチャン、行けたら行く」レベルの意味しかない『またね』だつたとしても、再会を示唆する別れの挨拶が、とにかく嬉しかつた。織原さんは軽く手を振り、人混みの中に去つていく。俺は彼女の背中が見えなくなるまで、沸騰したような頭でぼーっと見つめていた。

「……はあ、帰るか」

一人呟いてから、家の方へ向かう電車の乗り場へと向かう。なんだか、夢から覚めた気分だ。織原さんみみたいに綺麗な人が俺のために弁当を作つてくれたなんて、本当にもう夢としか思えないと。

でも、確かな現実だ。

だつてその証拠に、ここに彼女の弁当箱が入つたトートバッグが——

「……あ」

やべえ。返すの忘れてた。

どうしよう。今すぐ追いかけるべきか。いや待て、こういうのつて普通は弁当箱を洗つて返すのが礼儀だつたりするのか？ でも、毎朝自分の弁当を作つてると言つてたから、明日も使う予定なのかもしれないし……まあ、どつちにしても、今から追いかけで確認すればいいだろう。俺はくるりと踵きびすを返し、来た道を戻つて織原さんを探す。確か、駅の外にあるコインロッカーの方に歩いていったと思うんだけど……あ、いた。

人混みの中に、織原さんの後ろ姿を発見。

「お——」

名前を呼ばうとして、慌ててやめる。なぜなら彼女が、ちょうど女子トイレに入つていくところだつたから。

まいつたな。

さすがにこのタイミングだと、声はかけにくい。

とりあえず出てくるのを待つてるか。あんまり女子トイレの近くにいるのもなんだし、少し離れたところで待つているとしよう。

けれども。

十分経たつても——織原さんは女子トイレから出てこなかつた。

スーツ姿をしたOL風の女性や、小さい娘を連れた母親、うちの学校の女子など、たくさんの女性が出入りするけど、その中に桐女の制服を着た女子の姿はない。

さらに十分が経過。

彼女はまだ出てこない。

あれ？ 見逃したかな？

さすがにこれ以上女子トイレの入り口を觀察し続けるのは限界だつたので、俺は織原さんへとメッセージを送つた。今日のお礼と、弁当箱について。

返事はすぐに返ってきた。

文面から察するに、どうやら彼女は、すでに駅から去っているらしい。  
つてことは……女子トイレから出てくのを見逃したつてことなのかな？ まあ、ずっと集中して見てたわけじゃないから、スルーしてもおかしくはないと思うけど……うーん。  
どこか腑<sup>ふ</sup>に落ちない違和感<sup>（ひやくかん）</sup>があつたけれど——そんなものは全部、次のメッセージで吹き飛んだ。

『迷惑かけてごめんね。

また今度遊ぶときに、返してもらつていいかな？』

どうやら、労せずして次に遊ぶ約束ができるてしまつたらしい。

順調過ぎて怖いぐらいだった。



「へー。僕の知らないところで、ずいぶんと面白いことが起きてたんだね。でも嬉しいよ、モモにもようやく春<sup>（おも）</sup>が来たのか」

友人である金尾遙<sup>（かなおはる）</sup>の反応は、予想どおり爽<sup>（さわ）</sup>やかだった。

いつも通りの空き教室で昼食。

今日はウラに加えて、カナもいた。最近は新しくできた彼女と一緒に昼食を取ることが多かつたが、今日は俺達のところにやつてきたらしい。

「水臭いなあ。好きな子ができるなら、なんですが言つてくれなかつたんだよ。僕とモモの仲じやないか」

爽やかな笑みで頼もしいことを言つてくれるカナ。

つつてもなあ。街中で平然とナンパとかできちやうこいつと、恋愛経験ゼロの俺とじや、根本的に話が合わなそんなんだよなあ。恋愛偏差値に差があり過ぎてアドバイスがアドバイスにならなそう。

「友達としてできる限り協力するよ。モモに彼女ができるたら、僕も嬉しいしね。上手くいったら、そのうちダブルデートしようよ」

「……おい、カナ。お前、モモを恋愛中毒者<sup>（はげこじめいふまどうしゃ）</sup>どもが蔓延<sup>（はげこじめいふまどう）</sup>る冥府魔道<sup>（めいふまどう）</sup>に引き込むんじゃねえよ。モモは僕と一緒に、誰も愛さず、誰からも愛されない、気高き陰キヤ道<sup>（いんきやう）</sup>を歩むんだよ」

「お前の方が冥府魔道じやねえか」

軽く突っ込む。そんな俺とウラを、カナはくすくすと笑つていた。

金尾遙。

細身でスラッシュした体型で、顔立ちも整つたイケメン。明るく染めた髪はムカつくぐらいサラサラ。目元は涼しげで、見た目から清涼感が溢れまくつている。性格は極めて社交的であり、老

若男女を問わず誰とでもすぐ仲良くなる。高校入学してまだ一ヶ月にもかかわらず、すでに一学年全体の七割と連絡先を交換してゐるという。女たらしを通り越して、人たらしの領域に住まう男子だ。

浦野泉と同じ、俺の昔なじみの一人。

カナこと金尾遥は、小さい頃は割と暗くて引っ込み思案で、クラスでもいつも一人で本を読んでるような子供だった。しかし地獄のように天国だった中学時代を経て、このような陽キヤの中の陽キヤになった。

「でもさ、モモが一日惚れしたってことは、その姫ちゃんって子、かわいいでしょ？ ねえねえ、写真どかなの？」

「ねえよ。つーか、馴れ馴れしく下の名前で呼ぶな」

俺だってまだ織原さん呼ぶなんだぞ。まったく、これだから陽キヤは。どういう神経してたら、女子をいきなり名前で呼べるんだが。

「じゃあインスタは？」

「SNS全般、やってねえってさ。そういうの、よくわかんないとかで」「へえ。今時のJKにしては珍しいね」

まあなー。今日び、俺みたいな陰キヤすれすれの奴でもインスタやつてるからな。適当に人の上げた写真を眺めるだけで、自分からなにか投稿することはないけど。



「それでモモ、次のデートの約束はしたの?」

「まだだよ。と、とりあえず……一週間ぐらいたの向こうから連絡待つてみようかと思つててさ。あんまりがつついてる感、出したくないし」

「あのさモモ」

溜息混じりにカナは言う。

「そんな受け身が許されるのは、僕みたいなイケメンだけだよ?」

……イケメンつて。自分で言うなよ。

「ただ待つてただけで向こうから女が寄つてくるなんて、相当なイケメンじゃない限りありえない——いや、イケメンでも無理かもね。受け身なだけの男なんて、女子からしたらなんの魅力もないから。いいかいモモ? 全ての女性はお姫様なんだよ? いくつになつても、王子様にリードして欲しいと願う生き物なんだ」

「な、なるほどな……」

「けつ。なあにがお姫様だ。これだから女つて生き者は嫌なんだよ」

「けつ。なあにがお姫様だ。これだから女つて生き者は嫌なんだよ」

カナはさらに続ける。

「モモは昔、『昔話のお姫様が、王子様のなにに惚れるかわからん』とか言つてたけどさ。王子様は皆、自分からアクションを起こしてるんだ。お姫様の外見に惚れただけだったとしても、死に言い訳を重ねて受け身の自分を正当化していた俺には、王子様達を小馬鹿にする資格なんてなかつたのだ。

「きちんと自分から愛を伝えているんだ」

「それは——そつなのかもしない。」

「愛を伝える。想いを言葉にする——それはきっと、なによりも大切なことなのだろう。必死に言い訳を重ねて受け身の自分を正当化していた俺には、王子様達を小馬鹿にする資格なんてなかつたのだ。

「はんつ。結局は王子様がイケメンで金持ちだから成立する話だろうが。貧乏で不細工な男が、一生懸命アクトライブに行動しようと、ストーカー扱いされるだけだつづーの」

皮肉げな口調でなにもかもを台無しにする正論を吐くと、ウラはテーブルの上に置いてあつた俺のスマホに手を伸ばした。

「モモ、スマホ貸してみろ。アプローチするつもりなら、僕が文面を考えてやる」

「お、おい、やめろつて」

「こういうのはストレートなのがいいかなー、『こんにちは。好きです』」

「ストレートだなおい!」

「あなたに一目惚れしました。そう、つまり一目惚れなので、あなたの外見的要素、だけに惚れたということです。内面は一切評価していません」

「表現が悪意に塗れ過ぎだろ!」

「『どうか俺と、セックスを前提に付き合つてください』」

「『結婚を前提に』みたいに言つてんじゃねえよ！」

「なんだよ、あらゆる男女の付き合いは、結局セックスが前提のお付き合いだろ？ 僕、なんとか間違つてますか？」

「建前たてまえつてもんがあんだよ、この世には！」

「けつ。どうせモモもその女とやりたいだけなんだろ？ 性欲と恋愛感情を勘違いしてるだけなんだろ？ まさか出会つて三日やそこらで内面に惚れたとは言わせねえぜ？」

「それは……くそ。いいから返せよ」

ぎやーぎやーと言い争いながら、スマホを奪い合う俺達。

するとそこで——スマホが振動した。

俺は瞬時にウラからスマホを奪い取り、画面を凝視した。

書かれていたのは——信じられない文面だつた。

「ど、どうしたモモ？ やべえ顔になつてんぞ？」

「もしかして姫ちゃんから？」

ウラとカナに、メッセージの内容を伝える。いつも通りの嘔苦しい挨拶から始まり、俺が預かっている弁当箱について言及。弁当箱を返してもらうために、俺との時間を作りたいとのこと。そこまではいい。そこまで予想できていた。けれど最後の一文が、俺から平常心の全てを奪い去つた。

『お弁当箱を返してもらつついでに

桃田くんさうよかつたら

今度の日曜日、一日、私とデートしてくれませんか？』

なにが——なにが起こつたのだろう。

嬉しいを通り越して、頭が真っ白になりそうだった。

受け身なだけでいたら、ポンポンとイベントが進んでいく。好転していく。

願つてもない僥倖ぎやくこうに戸惑うばかりの俺に、かけがえのない友人二人は「ちつ。死ねばいいのに」壺つぼとか買わされないよう気につけなよ」と、大変温かい言葉をくれた。



日曜日までに、服をどうにかしようと思つた。

高校に入つたらもうちょいファッションも頑張ろうと決意していた俺だけれど、入学一ヶ月ではまだなんの用意もない。まさかこんなにも早く、己おのれのファッションセンスが試される日が来るとは予想してなかつた。

カナか姉貴にでも頼んで、デート用の服を丸ごと一式コーディネートしてもらおう。そう考  
えていたのだが——しかし幸か不幸か、その必要はなくなつた。

「あつ。おはよう、桃田くん」

今日は織原さんが、早く待ち合わせ場所に着いていた。軽く挨拶を返しながら、俺は彼  
女の下へ歩く。自然と小走りになつてしまつた。

約束の日曜日。

時刻は午前十時。集合場所は、前と同じ駅前の広場。

そして——格好までもが前と同<sup>じ</sup>。

俺も織原さんも、制服姿だった。

「あの……今日、どうして制服なんですか? いや全然、別にいいんですけど  
お互いに制服で来よう、というのは織原さんからの要望だつた。異論はない。むしろ服で悩  
まずに済んで助かつたと思つてゐる。

ただまあ、織原さんの私服姿を見られなかつたのが惜しいような気もするけど。

「特に意味はないんだけどね」

織原さんは苦笑しながら言うと、両手でスカートの端をチヨンと擒んでみせた。

「制服デート、してみたくてさ」

「デート」。その単語だけを変に意識してしまい、気恥ずかしさを感じずにはいられなかつた。

「ああ、やつぱりこれ、デートなんだよな。

「さて、と。じゃあ、行こうか、桃田くん」

「はい……つて、どこに?」

「どこつて決めてるわけじゃないんだけど……なんか、適当に、ぶらぶらしようよ」

「ぶらぶら」

「そ。ぶらぶら」

織原さんは晴れやかな笑顔で言う。

「学生らしいデート、しよ」

まずは昼食。

二人で駅中のハンバーガーチェーンに入った。

「わあ。こういうところ來の、すつごい久しぶり」

目を輝かせる織原さん。俺は友達とよく来るけど、お嬢様高校に通う彼女は、やはりこう  
いったチエーン店にはあまり来ないようだ。

店内には俺らと同年代の学生達がたくさんいた。織原さんを見て「あの桐の子、かわいく  
ね?」とヒソヒソ会話する奴らもいて、少し誇らしい気にもなつた。

一人でセットを注文。料金は織原さんの希望で割り勘。奥にある席に座り、手頃な価格のハンバーガーを食しながら、取り留めもない話ををする。

「へえ。織原さん、意外とゲームとかやるんですね」

「やるやる。めっちゃやる。休みの日なんか、一步も外出ないで一日やつてるかも」

「今はなにやつてるんですか?」

「いろいろやつてるけど、一番やつてるのは『スマブラ』かなあ」

「ほんと?」

「あ。俺もやつてます」

「面白いよね、『スマブラ』! 何歳になつても面白い! 私、『ロクヨン』の頃か

らうつとやつててさ! コントローラーの真ん中のアナログスティックが、クタクタになるぐ

らいやりこんじやつて——」

「……ろくよん? ろくよんつて、なんでしたつけ?」

「え……あつ。そ、そつか、今の中学生は普通、『ロクヨン』知らないよね。私は……えつと、

お姉ちゃんがいたから、うちに『ロクヨン』があつたんだけど……じゃあ桃田くんは、『キュー

』から『スマブラ』始めたタイプ?」

「きゅーぶ……? いや、普通に『ウイー』が最初ですけど」

「……さ、最初つから『ウイー』世代……!」

織原さんはなぜかそこで、急所を抉られたかのような深い絶望の表情となつた。

「ほんとですか?」

「そ、そうですね」

食事の後は、カラオケに行こうという話になつた——のだけれど。  
「……や、やっぱり、やめよつか」  
「そ、そうですね」

店舗の前まで移動しながら、結局一人してあと一步が踏み出せずに終わつた。うん、やっぱカラオケはハードルが高い。相手の前で歌うのが恥ずかしいし、密室空間に二人きりつてもいろいろ難易度が高い気がする。

カラオケにこそ入らなかつたが、そこから音楽の話が始まる。

「織原さんは、どういう音楽が好きなんですか?」

「うーん、特定のコレっていうのはないかなあ。なんでも聞く。そのときそのときで、自分の中でブームが変わる感じ」

「あー、俺もそんな感じですねえ。ドラマやアニメの主題歌とかから、そのジャンルにハマるのが多いです。それで、自分で勝手に自分用の『ベスト』作つたりとか」

「あ。それ私もやる」

「ほんとですか?」

「うんうん。シチュエーション」と自分だけの『ベスト』作つたりしてね。懐かしいなあ。中

学校のときとか、『落ち込んだとき用』とか、『勉強BGM用』とか、そういうのMDでたくさん作ってたなあ

「……えむでいー？ つて、なんですか？」

「あれ……え、MD知らないの!? 嘘……じゃあ、なにで音楽聴いてたの……? 桃田くん、生

まれて初めて買った音楽プレイヤーは……?」

「普通に『iPod』ですけど」

「……さ、最初っから『iPod』世代……!」

織原さんはなぜかそこで、臓腑を丸ごと削ぎ取られたかのような苦悶の表情を見せた。

次は書店へと足を運んだ。

ゲームと音楽に関しては、いまいち話題が囁み合わない感があつたのだけれど、なぜか漫画に関してはバッチャリ話があった。

「桃田くんって、結構、昔の漫画読んでるんだね」

「まあ、なんかしら日にする機会が多いですからね。あと、漫画アプリで再連載してるので見て、そつから興味持つて電子書籍で買ったり、漫画喫茶で読んでみたり」「なるほど」

「俺らが生まれる前に連載が始まったような漫画が、今も続いてたりもするし……あと最近になつてアニメ化したりしますからね」

「あー、確かにね。最近、過去作のリメイクが多いよね、アニメ業界」

「『ワンピース』も俺らが生まれる前からやつてる作品らしいんですけど、親父が買ってたんで、小学校ぐらいから一緒に読んでましたね」

「……へえ、お父さんが。ち、ちなみに、お父さんつていくつ?」

「えっと、俺の23上だから……今年で38かな」

「さ、38?」

「はい……ど、どうかしました?」

「う、ううん。なん、でも、ない……」

織原さんはなぜかそこで、白目を剥いて卒倒しそうになつていた。

午後三時を超えた辺りで、駅の近くにある『ラウワー』に向かつた。学生らしいデートの定番といえば、この辺りだとやはり『ラウワー』になるだろう。日曜日ということで、建物の中は混雑していた。家族連れや学生と<sup>おは</sup>思しき集団、そして若いカップルなど。彼らの会話や流れる音楽で、建物の内部はだいぶ騒々しかつた。

「わ、わ……すごーいっ」

二階にある受付から吹き抜けのフロアを見渡し、織原さんは目を輝かせた。

「もしかして、『ラウワー』来るの初めてですか?」

「う、うん。実は、そうなの」

興奮を隠しきれない様子で、小さく頷く。

「なんていうか……高校での私って、そういう感じじゃなくてさ。ずっと興味はあつたんだけ

ど、来る友達もいなくて」

表情に陰を落として呟いた後、なにかを期待するような目で俺を見る。

「桃田くんは、よく来るの?」

「まあ、それなりに」

「じゃあさー」

織原さんは言う。

俺の制服の袖を、ぎゅつ、と掴みながら。

「今日はここ遊び方教えてね、桃田くんつ」

その仕草と言葉は、俺の胸を撃ち抜くには十分過ぎた。

教えると言つても、総合アミューズメントパークに正しい遊び方なんてものは存在しないだろう。ただただ好きなことをやればいいだけだ。

ボウリング、バッティングセンター、ミニバス、ダーツ、卓球、テニス、バドミントン、セグウェイ、ゲームセンター……などなど。

俺達は時間の許す限り、様々なアトラクションを満喫した。

学生らしい、健全で低予算なデートを、満喫した。

「あーっ、楽しかったつ。久しぶりに思い切り動いた気がする」

五階でエレベーターを待つて、途中、織原さんは大きく伸びをした。

「でもアレだねえ……桃田くんつて、意外と運動オシチなんだね」

「うぐつ……」

「バッティングセンター、一球もかすりもしなかつたし、バドミントンや卓球も空振りばっかりで……バスケのドリブルなんか、ヨボヨボのおじいちゃんみたいで——あつ。ご、ごめんつ。違うよつ、バカにしたわけじやなくてつ」

際限なく落ち込み始めた俺に気づいたのか、織原さんは慌ててフォローをいれてきた。

「その、あの……か、かわいかつたよ!」

「……嬉しくないです」

「わ、悪く言うつもりは全然なくて、ただ驚いただけだから……桃田くん、背も大きく

て筋肉質だから、てっきりなにかスポーツやつてるのかと思つてて

「……運動全般、昔つから全然ダメなんですよ」

昔から背だけは大きい方だったため、スポーツ関連では、勝手に期待されて勝手に失望されることが多かった。本当に多かった。高校に入学したときもバスケット部やバレー部から『是非』と誘われたが、必死で断つた。それでも諦めてくれないから、仕方なく体験入部にいつたところ……一度と誘われることはなくなった。

「筋肉があるのは、親父の仕事、たまに手伝つたりしてるので……てか、運動オノンチなのは、織原さんも一緒でしょ？」

「なつ」

「俺の後に『お姉さんが見本を見せてあげるわ』なんて得意気に言いながら入つたくせに、結果、俺と同じで全球空振りだつたじゃないですか」

「ち、違うもん！ 私は、一球だけかすつたもん！ チッ、つて音なつたから！」

「一緒ですよ！」

「違う！ 私の方がちょっとすごいっ！」

数秒睨み合つけれど、

「……ぷつ」あはは

すぐにお互い、あまりのくだらなさに、吹き出すように笑つた。

エレベーターが到着し、俺達は一階へと降りていく。

ああ——楽しいな。

幸せつて、こういう瞬間のことを言うんだろうか？

なんかいい雰囲気な気がする。よし。今なら、次のデートの約束を取り付けられそうだ。これまでずっと相手にリードされてばかりだったから、今日こそは自分から次へのアプローチを繰り出さねば。

受け身は今日で卒業しようじゃないか。

エレベーターから降りて、一階のゲームセンター「コーナー」を横切つて出口へ向かう途中、昨日必死で考えた『次のデートへの誘い文句』を頭の中で反芻する。

そしていざ口に——出そうとしたところで。

「——つ!! か、隠れてっ！」

織原さんがビクリと身を震わせたかと思えば、いきなり俺の手を掴んできた。

「えつ、な、え？」

「かい……が、学校の知り合いがいたの！ お願ひつ、一緒に隠れて！」

切羽詰まつた様子で訴えながら、織原さんは俺の手を引つぱり、二人でプリクラ機の陰へと隠れた。筐体と筐体の隙間はかなり狭く、結果としてお互いの体がかなり密着してしまった。

「——つ！」

「ごめんっ、桃田くん、大丈夫っ？」

「だ、大丈夫ですっ」

本当は全然大丈夫じゃねえ。まずい。いろいろまずい。ちょうど真正面から抱き合おうような体勢になってしまったため、俺の体に、織原さんの豊かな胸が思い切り当たっている。圧迫されてひしやげる二つの膨らみ。柔らかく、それでいて弾力にも富み、ブレザー越しでも破壊力は抜群だった。

「……どうしよ。こんなとこ見られたら」

よほど焦っているのか、織原さんは知り合いの動向ばかりを気にしていて、俺との密着具合には気づいていない。ぐいぐいと無造作に無遠慮に豊乳が押し付けられ、生々しい温度の吐息が首筋を撫でる。まずい、まずい、ってこれ。

「んっ……桃田くん、もっと、奥まで……あんっ……お、大つきいっ」  
エロいって！ エロ過ぎるぞ、織原さん！ 「訳：桃田くんは身長が大きいので、もっと奥まで詰めてください」と頭じゃわかつてるけど変な風にしか聞こえねえから！

「……あ。よかつた。カラオケの方にいったみたい」

通路の方を見ていた織原さんが安堵の息を吐く。知り合いはいなくなつたようだ。

「はあ～、ほんとによかつた……って、あ……や、やだっ」

危機を脱して安心したことで、ようやく俺達の現状に気づいたらしい。織原さんは逃げるよ

うに筐体の隙間から飛び出した。

「ご、ごめんね、桃田くん……その、へ、変なの押し付けちゃつて」

全然構いません。むしろもつと押し付けてください——なんて言えるわけもない。視線を逸したまま、「……だ、大丈夫っす」というのが精一杯だった。

『きやーっ、へんたーいっ！』とビンタされることも覚悟してたのに、まさか謝られてしまうとは。なんだろ、この人は天使なのか。それとも女神なのか。

「つーか……冷静に考えたら、二人で隠れる必要なかつたですよね。織原さんだけ、プリクラの中にでも入つてれば」

「え……あっ。そうだね……。テンパつてて、全然気づかなかつた……」

恥ずかしそうに苦笑する織原さん。それからほんやりと、なにかを懐かしむような目で、プリクラの筐体を眺めた。

「ねえ桃田くん。よかつたら、一緒にプリクラ撮つてもらつていい？」

「プリクラ、ですか」

「私……撮つたことなくつてさ。桃田くんはある？」

「あー、昔、姉貴に付き合わされて撮つたぐらいですね」

小学生の頃の話だ。プリクラは、十年前ぐらいに大流行だつたと聞く。当時のJK・JCからの人気が凄まじかったとか。スマホや自撮りアブリが普及したせいで、最近はだいぶ人気が

落ち着いているようだけれど。

「ねえ、撮ろうよ、桃田くん。今日の思い出にさ」

織原さんに促されて、俺達は白いカーテンの中に入る。

「わっ……な、なにこれ、どうしたらしいの？」

「確か、ここにお金入れればよかつた気が」

「え、え、え!? なにこのフレームって、どれ選べばいいの!?」

「たぶん、なんか適当に選べばいいんじやないかと」

「も、桃田くん!? 大変だよつ、制限時間がなくなつちやうつ！」

「大丈夫ですつて。時間なくなつたらなくなつたで適当に進みますから。たぶん……」

よくわかつてない者同士、あたふたしながら撮影を済ませる。やたらとテンションの高い機

会音声は、「今度は二人で抱き合つてみよう!」「二人の顔を、ぎゅーつて近づけて!」など空

気を読まない妄言を繰り返していたが、俺達二人は、少し距離を空けて並び、ぎこちないピー

スサインを作るので精一杯だった。

「こ、これで撮れたのかな?」

「はい。あと、こっちで落書きとかできますよ」

「落書き……わ、私よくわかんないから、桃田くんやつてよ!」

「む、無理ですよ、俺、こういうのセンスないですから!」

またもや素人同士、あたふたしながら落書きを済ませる。日付や名前を入れたりという、本当にオーネドックスな加工だけを施した。

一分ほど待つていると、筐体の横から完成したプリクラが排出される。近くのテーブルに置いてあつたハサミで完成品を二人分に分けた。

「わあつ、すごーいっ。プリクラだプリクラ、初プリクラっ！」

織原さんは目を輝かせ、サンタからプレゼントをもらった子供のように喜ぶ。

「ありがとね、桃田くん、私のわがままに付き合つてもらつて」

プリクラを胸に抱きしめるようにして、彼女は言う。

その声には、その表情には、どこか神聖で、静謐な雰囲気があつた――

「私、一生の思い出にするから」

「――」

どうして、だらうか。

その瞬間、胸が激しく痛んだ。

笑っている。

織原さんは、本当に幸せそうに笑つている。

だけど俺には、必死に涙を堪えていたように見えた。顔で必死に笑顔を作りながら、今にも溢れだそつとする涙を必死に抑え込んでいる。

寂しく、僨く、脆弱く。

それでいて、なんらかの覚悟を決めたような、あまりに悲痛な笑顔——

「え……も、桃田くん？」

気がつけば。

俺は、プリクラを握りしめる織原さんの手を握りしめた。

今捕まえなければ、どこかに行ってしまう気がしたから。

こんなにも近くにいるはずの彼女が、急激に不鮮明な存在に思えて、ふとした拍子に消えてしまうような気がしたから。

彼女の手から溢れたツーショットのプリクラが、ふわりと床に落ちる。

「好きです、織原さん」

俺は言った。

覚悟——なんてなにも決まつていらない。

理性も思考もなく、本能と衝動のままに、想いを言葉にしてしまった。

直後、猛烈な後悔と羞恥が襲い掛かってくる。心臓が信じられないぐらいに高鳴り、体中の血液が逆流したみたいに全身が震え出した。

自分でわからぬ。

なんていきなり、告白してしまったのか。  
ただ——どうしようもないぐらいに、もどかしくなつてしまつたのだ。

今この瞬間を逃したら、もう二度と彼女に会えなくなるような。

目の前にいる織原姫という存在を、永劫に失つてしまつような。

そんな喪失感が、俺の思考を狂わせた。

「え……あ」

織原さんは目を見開き、呆然としていた。握んだ細い手首からも動搖が伝わつてくる。怯え

ているようにも見えて、罪悪感すら湧いてきた。でも、もう後には引けない。恐怖と緊張を必死に押し殺し、胸の奥底から言葉を振り絞る。

これが俺の、生まれて初めての告白——

「好き、です……織原さん。たぶん、一目見たときから、ずっと」

たぶん、はいらなかつたかも知れない。

でも——これが本音だ。素直な想いだ。

一目惚れなのかどうかは、自分でもわからない。でも今、「一目惚れだったことにしたい」自分がいる。なにもかもが運命で、俺達は出会うべくして出会つたのだと、愚直なまでに信じていて——その想い込みを、少しでもいいから勇気に変換したい。

「まだ、出会つてから一週間も経つてなくて……なに言つてんだって思うかもしれないですか……でも、好きです。どうしようもないくらいに、大好きです。出会つてからずつと……あなたのことだけ、考えてます」

友人のウラは言つていた。

「どうせやりたいだけだろ、と。

出会つて三日やそこらで、内面に惚れたとは言わせねえぜ、と。

確かに見た目は大きい。織原さんの見た目が、俺は大好きだ。顔にしても体型にしても本当にストライクど真ん中。やりたくないと言えば当然嘘になる。童貞が性欲と恋愛感情を混同しているだけだと非難されれば、正直返す言葉がない。

でも、それだけじゃない。性欲だけじゃない。

まだ数えるほどしか会つていないけれど、彼女と一緒にいる時間が、楽しくて楽しくて仕方がなかつた。失いたくない。手放したくない。この幸福な一瞬を、どうか永遠のものとしたい。たとえそれが性欲由來の感情だったとしても、どうか今だけは、この暴れ狂う想いを『恋』と呼ばせて欲しい。

「まだお互いのこと、なんも知らないと思います。でも、これから少しずつ知つていただきたい。あなたのことを知りたいし、俺のことも知つてほしい。織原さん……俺はもつと、あなたと一緒にいたいです」

もつと一緒にいたい。

もつと——相手を知りたい。

もつと——自分を知つてもらいたい。

もつと知つて、もつと知つてもらつて——もつともつと好きになりたい。

こんな気持ちになつたのは、生まれて初めてだつた。

友人のカナは言つていた。

受け身なだけの男にはなんの魅力もない、と。

王子様は皆自分からアクションを起こしている、と。

ならば——自分から動くしかないだろう。

金持ちでイケメンな王子様であつても、能動的に動かなければお姫様を手にできないというのであれば、俺のような童貞が受け身なまでいてなにかが変わるはずもない。勇気を振り絞つて、想いを言葉にしなければ、世界は変わらない——

「好きです、織原さん。俺——付き合つてください」

俺は言つた。

緊張と興奮で茹だつてしまいそうな頭で、どうにか想いを言葉にした。心臓の動悸はまるで収まらない。相手の顔を見るのが怖くて、俯いて目を閉じていた。

返事を待つ間は、とてもなく時間が長く感じた。永劫の如き沈黙に耐えきれなくなり、俺

は恐る恐る顔を上げて、目を開けた。  
そして目に入ったのは――

「……っ」

涙、だつた。

織原さんは泣いていた。魂が抜けてしまつたような顔で、静かに、とても静かに涙を流していた。ずっと握り締めていた手を、反射的に離してしまつ。

「お、織原、さん……？」

「……うつ……うつ、ううう」

両手で顔を隠し、嗚咽を漏らし始める。溢れ出す涙は手だけでは到底抑えきれず、零となつて頬を伝い、落ちていく。

「……め……さい」

困惑する俺に、織原さんは嗚咽混じりの声で告げる。

「――ごめんなさい」

止まつた、気がした。

時間も、呼吸も、心臓も、世界も、なにもかもが。



それなのに頭だけは、思考だけは、妙に冷静で妙に冷めていた。

『ごめんなさい』。

それはきっと、告白を断るときの定型句なのだろう。悪いなんて微塵も思ってなくとも、相手になんの思い入れもなくても、相手が好意を伝えてきたなら、社交辞令で『ごめんなさい』と返すのが、この国の礼儀みたいなものだ。

けれど――

『ごめんなさい……ごめ、なさい……ごめん、なさ、い……』

織原さんはまるで、なにかの呪いのように『ごめんなさい』を繰り返した。滂沱の如く涙を流しながら繰り返される謝罪は、とても社交辞令には思えなかつた。

本当に、心の底から、謝つているかのよう。

罪の意識で、押し潰されそうになつてゐるかのよう――

何度も何度も『ごめんなさい』を繰り返した後、やがて彼女は、涙も拭かずに逃げるよう<sup>ふ</sup>去つていつた。俺は――立ち尽くすことしかできなかつた。足元には彼女が落としていつたプリクラがある。写真の中の俺達二人は初々しくも幸せそうで、ほんの数分前の出来事なのに、別世界のことのように思えた。

わからない。

なにがなんだか、わからない。

ただ一つだけ言えるのは、今日は俺が生まれて初めて告白をした日で。

そして、生まれて初めて失恋をした日になつたということ。

## 第二章

# お姫様には秘密があったのです。



翌日は月曜日だったけれど、朝、ジャンプを買い忘れていた。

それに気づいたのが放課後だった。

「はつはつはつはー」。残念だったなあ、モモ

放課後の空き教室には、言葉とは裏腹に大層楽しそうに笑うウラがいた。アメーバのように机にもたれかかった俺の肩を、馴なれ馴なれしく叩たたいてくる。

「やっぱりモモには、僕と同じエリート陰キャの血が流れてるのさ。恋愛なんぞに現を抜かそうとしても、誇ほこり高きお前の血がそれを許さないんだよ」

エリート陰キャってなんだよ、と普段なら軽く突つ込むところだが、今日はなにも言う気が起きなかつた。昨日、家に帰つてからずつとこの調子だ。なにもやる気が起きない。胸にボツカリと穴が空いてしまつたようだ。

「しつかし、その織原とかいう女は大した悪女だな。自分からデートに誘つといて、いざ告白されたら『ごめんなさい』なんて、意味不明にもほどがある。脈がないなら、最初から優しく

起きなかつた。昨日、家に帰つてからずつとこの調子だ。なにもやる気が起きない。胸にボツカリと穴が空いてしまつたようだ。

「しつかし、その織原とかいう女は大した悪女だな。自分からデートに誘つといて、いざ告白されたら『ごめんなさい』なんて、意味不明にもほどがある。脈がないなら、最初から優しく起きなかつた。昨日、家に帰つてからずつとこの調子だ。なにもやる気が起きない。胸にボツカリと穴が空いてしまつたようだ。

「あー……悪い」

尋常じやないぐらいビビった顔が目に入り、ハツとして手を離す。涙目になつたウラは、凄すさまじい速度でカナの背後に隠れた。

「こ、この野郎つ！ や、やんのか!? やるならもう、僕、キレるぞ！ 僕、キレつとヤベえんだからな！ キレたら記憶なくなるけど、冷徹な殺人マシーンになつて、身の回りにある文房具とかで的確に人体の急所を突くんだかんな！」

「あー……悪い」

尋常じやないぐらいビビった顔が目に入り、ハツとして手を離す。涙目になつたウラは、凄すさまじい速度でカナの背後に隠れた。

「こ、この野郎つ！ や、やんのか!? やるならもう、僕、キレるぞ！ 僕、キレつとヤベえんだからな！ キレたら記憶なくなるけど、冷徹な殺人マシーンになつて、身の回りにある文房具とかで的確に人体の急所を突くんだかんな！」

「記憶ありまくりじゃないか」

カナは冷静に突つ込みながら、ウラの頭を軽く撫なでる。

「今のはウラが悪いよ。いくらなんでも無神経過ぎる」「な、なんだよ……カナまで」

「僕はシユンと落ち込む。もうあそ

「わかつてゐるよ、ウラなりにモモを元気づけようとしてたことは。けど恋愛ってのは、そう单

純なものじやないから」

カナはその涼しげな目を、俺の方へと向ける。

「とりあえず、お疲れ様。モモ。柄にもなく頑張ったみたいだね」

「……ん」

憔悴しきった心には、労いの言葉が深く染みた。

ほんとこいつは、ムカつくぐらいイケメンだなあ。あーあ、もう、カナと付き合つちゃおうかな。女なんてもう懲り懲りだわ。今彼女いるらしいけど、二番目でもいいから——なんてバカな思考を振り払い、俺は顔を上げる。

椅子に体を預けて天井を仰ぎ、深々と息を吐いた。

「あー……畜生。しんどいなあ……」

昨日の今日だ。立ち直れるはずもない。本当は学校も休んでしまったかったけれど、皆勤賞のために体を引きずるようにして登校した。

それに——家に一人でいるよりも、誰かに愚痴を聞いてもらいたかった。気心知れた友人であるこいつらに、どうにもならない消化不良な思いを吐き出したかった。

「……別に勝算とかを計算してたわけじゃねえんだけどさ。イケるかもしれない、って思つてた部分はあつたんだよ。向こうから、いろいろ誘つてくれたらし、一緒にいるとき、織原さんもすげえ楽しそうだつたし……」

脈はあると思つていた。でもそれは、自惚れだつたのだろうか。女に慣れていない童貞が、相手の気遣いや社交辞令を愉快に勘違いしてしまつただけなんだろうか。

「ほんと……なんだつたんだろうな」

なんだつたんだろう。

この一週間は、なんだつたんだろう?

彼女にとつて俺は——織原姫にとつての桃田薰は、なんだつたのだろう?

「ねえ、モモ。相手の女子の名前つて、織原姫ちゃんで、いいんだよね?」

ふと真面目な顔して、カナが問うてきた。

「あ、ああ。それが、どうかしたのか?」

「悪いとは思つたんだけど……僕の方でその子のこと、ちょっと調べちゃつたんだよね。モモがどんな女の子に惚れたのか気になつてさ。桐女にいる友達何人かに連絡して、どういう子か聞いてみたんだ」

「お前、そんな」としてたのかよ」

「いなないつてさ」

カナは言った。

「いなないんだよ、モモ。今の桐女の一年には、織原姫なんて生徒はいないらしい」

「は……? いなない? ど、どういう意味だよ?」

「そのままの意味だよ。五人ぐらいに聞いてみたけど、誰も知らなかつた。探しても見つからなかつたらしい。織原姫は——桐女の生徒の中にはいなかつたんだよ」

「…………」

意味がわからなかつた。

いない？

いないって、どういうことだ？

「……偽名、だつたってことか？」

「その可能性もあると思う。でも僕は別の可能性の方を疑つてる。その子はもしかすると

——桐女の生徒ではなかつたんじやないのかな？」

「はあ？ なに言つてんだよ。織原さんはちゃんと桐女の制服を——」

「制服、しか見てないんでしょ？ 学生証を見たわけでも、彼女が桐女に通うところを見たわけでもない。桐女の友人といふところを見たわけでもない。モモが彼女を桐女の生徒だと思える理由、制服以外になにがあるの？」

「…………」

なにも言葉が出てこなかつた。

改めて考へてみれば、制服ぐらいしかないのでかもしれない。彼女を桐女の生徒だと証明するものは、制服以外なにもなかつた。

俺が知つてゐる織原さんは、いつも制服を着ていた。  
日曜日のデートのときであつても。  
まるで誇示するみたいに。  
まるで——自分が桐女に通うJKだとアピールするみたいに。

「ふん。僕は最初から、なんか怪しい女だとは思つてたぜ」

ウラもまた、神妙な顔つきとなつて告げる。

「一週間前に遅刻ギリギリで学校に来たとき、モモはその女が電車で痴漢に遭つたのを助けたらしいけど——そもそも桐女に通う女子が、モモと朝同じ電車に乗るわけがないんだよ。向かう方向が真逆なんだから」

それは——俺も抱いた疑問だつた。忘れ物でもしたんだろう、と決めつけてそれ以上深く考へることはしなかつた。

「モモ、お前まさか……モテな過ぎて、実在しない女の幻を見たのか？」

「そ、そんなわけ、ねえだろ」

失礼過ぎるウラの発言にも、しかし強く言い返すことができなかつた。全身から血の気が引いていくのがわかる。言いようのない不安感が、足元から徐々に昇つて体を包み込んでいく。

「幻じやねえなら……モモ」

ウラは言う。

「お前——誰を好きになつたんだ?」

俺は答えられない。

織原さん——織原姫さん。

彼女は、俺が好きになつた彼女は、いつたい何者だつたんだろう。まさか本当に幽霊や妖怪の類だつたともいいうのか。

この一週間の出来事が、急激に不確かなものに変わっていく気がした。『全部夢オチですよ』と言われれば、うつかり信じてしまいそう。

恐怖にも似た感情に支配されて硬直してしまう——そんな俺を現実に引き戻したのは、ポケットの振動だつた。

画面を見て——驚愕と安堵を同時に覚える。

織原さんからのメッセージだつた。

連絡が来たことに対する驚きと、彼女の存在が夢ではなかつたことを確信できる安心。いつもとは違い、戸惑つた挨拶は存在しない。

不自然なぐらいに他人行儀な文章で、用件だけが書いてあつた。

『昨日は、急に帰つてしまいすみませんでした。

これから、時間があれば会つて欲しいです。

不自然なぐらいに他人行儀な文章で、用件だけが書いてあつた。

そこで全部、お話ししようと思ひます



指定された場所は、駅の近くにあるファミレスだつた。

先に着いた俺は、奥まつた禁煙席へと腰掛け、ドリンクバーだけ注文する。窓の外を眺めると、すでに日が暮れ始めていた。夕暮れに染まるアスファルトを、部活帰りの学生達が自転車で走り抜けしていく。

五分ほどで、織原さんはやつてきた。

「こ、こんばんは」

「……うん」

どうにか絞り出した挨拶には、そけない返事が返つてきた。織原さんは暗い顔のまま俯いている。いつもより心なしか化粧がキツいように見えた。

格好は——何度も目にした桐女の制服。

この人は、桐凜女学院の生徒ではないはずなのに——

テーブルのボタンを押し、彼女もまたドリンクバーだけ注文する。店員がいなくなると、地獄のような気まずさが襲つてきた。

……キツツいなあ、これ。

なんなんだろう、この状況は。生まれて初めての失恋を味わった翌日に、なんでもまたその相手と一人きりで顔を突き合わせなければならないのか。ぶつちやけ断りたくてたまらなかつた。でも、来ないわけにはいかなかつた。話を聞かないわけにはいかなかつた。

知りたかった。

俺が惚れた女が、いつたい何者なのか——

「……まず、最初に言つておきます」

気まずい沈黙を破つたのは、織原さんだつた。

感情を押し殺したような低い声で、淡淡と言つ。

「変に期待されると困るから、はつきり言うね。私は……きみとは付き合えません。今日呼び出したことで、なにか勘違いさせていたなら、ごめんなさい」

「……はい」  
キツい。死体蹴りもいいところだ。淡い期待なんか全く抱いてなかつたけれど、改めて口に出されると、想像以上にしんどいものがある。

「今日、会つてもらつたのは……桃田くんに、本当のこと話をそつと思つたから」

「本当のこと」

「私、きみにずっと隠していたことがあるの……ううん、違う。隠してたんじゃない。私はきみのこと、ずっと騙していた」

痛みに耐えるような顔で、織原さんは続ける。

「このままお別れしたら、あまりに不誠実な気がするから……最後に、ちゃんと全部、説明させてください」

ここで少し待つてて。

と言つて、織原さんは席を立ち、ファミレスから出ていった。

隠していた？ 騙していた？ なんのことだろう。でか今来たばかりなのに、なんで店から出てくんだけ？ 無数の疑問で頭が埋め尽くされそうになるけれど、俺は言葉に従い、ドリンクバーのコーヒーを飲みながら彼女を待ち続けた。

二杯目を飲み干したところで——一人の女性が俺の方に歩いてきた。

スーツに身を包んだ、OL風の女性だ。

黒い髪を後ろで纏めていて、目元には細いフレームの眼鏡。パンプスで床を鳴らしながらテーブルの間を歩いてくる。

奥にあるトイレに向かうのかと思えば——彼女は俺の席で止まつた。無言のまま俺の対面に、さつきまで織原さんが座つていた席に座る。

「……え？ あ、あの、すみません、もうすぐ、知り合いが来るんで」

「は——はじめまして、桃田薫くん」

戸惑う俺を無視して、OL風の女性は、緊張と気まずさを感じさせる声で言つた。その声を

聞いた瞬間——頭が大混乱に陥る。

今のは——彼女の声だった。

改めて、女性を正面から見つめる。

髪型も服装も、なにもかもが別人のように違う。でも、よくよく見てみれば、顔は全く一緒だった。彼女そのものだった。

「私の名前は織原姫……年は、に、27歳、です」

なにを、どう言えばいいのだろうか。

俺が好きになった女子高生は——27歳だった。



### 第三章

# そう。お姫様は アラサーだったのです。



株式会社 はるみ生活

マークティング事業本部

ダイレクトマーケティングチーム チーフ

織原姫

ORIHARA HIME

渡された名刺には、なんだか仰々しい肩書きが書いてあった。

『はるみ生活』と言えば、高校生の俺でも知っているような有名企業だ。化粧品やサプリメントを主に取り扱う会社で、テレビやネットのCMでもよく名前を目にする。本社は東京にあるらしいが、この辺りにも支部があったはず。

名刺の他に、社員証や免許証まで見せられた。

「……これで、わかつてもらえたかな?」

スーツ姿の織原さんは、まだどこか恥ずかしそうな顔で言う。

俺は——額くしかなかつた。名刺や免許証など、確たる証拠を突きつけられてしまつては、もう疑う余地はない。

織原さんは——女子高生ではなかつた。  
大人で、社会人で、会社員で、27歳だつた。

「女子高生だなんて嘘ついてしまつて……本当にごめんなさい」  
「い、いえ」

丁寧に頭を下げられても、謝罪を受け止めるだけの心の準備がまだできていない。頭も心もいっぱいいっぱいで、どうしたらいいかわからない。

「あの、さ」

なにも言えずにいる俺に、織原さんは問うてくる。

「ほ、本当に、気づかなかつたの……?」

「え」

「私が女子高生じゃないって」

「……はい」

「全然? 少しも? 全く? 無理してると感じとかなかつた?」

「……は、はい、ちつとも」

「そ、そつか。ふーん、そつかそつか」

少しだけ口元を綻ばせる織原さん。必死に冷静な表情を保とうとしているようだけど、喜びが抑えきれない様子だった。

「いやだつて……気づくわけじゃないじゃないですか。まさかいい年こいた大人が、年甲斐もなくJKの格好して、堂々と恥ずかしげもなく街中を歩いてはしゃいでたなんて——あ

失言に気づいたときには、もう遅かった。

織原さんは、致命傷を負ったかの如くテーブルに突つ伏した。にまにま顔が一点、瀕死の形相で悶えている。『殺せ、私を殺せ』と顔に書いてある。

「す、すいません」

「……ううん、いいのよ。自分でもキツいことやつてたつて、自覚あるから。はあ、ほんと、なんでこんなことになっちゃつたんだろう?」

自嘲気味に咳きながら、織原さんはゆっくりと体を起こす。

もう一度改めて彼女の姿を見る。

正直、違和感がすごい。女子高生がスーツを着ているようにしか見えない。でも違う。違うのだ。俺が最初に、ブレザー姿で出会つてしまつたから、変な補正が働いているだけなのだろう。

今日の前にいる、スーツを着こなす大人の女性が、本当の織原姫。

彼女の本当の姿が、これなんだ。

「——嘘、だつたんですね、全部」

言葉が、溜息のようになにか見えた。責めたつもりは全くなかつたのだけれど、織原さんは苦しそうに唇を嚙み締めた。

「桐女に通つてるつてことも、タメだつてことも」

「……うん、そう。本当に、ごめんなさい」

「誕生日とか、干支は」

「そ、それは本当」

食い気味に言う織原さん。誕生日と干支は本当だつたらしい。

俺と同じ、巳年——つてことは。

「……あ、そつか。年が一回り違うのか

27歳と15歳。

その差は——12年。

「ひ、一回りも違わないよつ！ 11年と10ヶ月だから！」

一人納得した俺に対し、いきなり織原さんが叫んだ。

そこだけは譲れないとばかりに、大きな声で。

しかし、ムキになつてしまつた自分を恥じたのか、  
「……まあ、ほんと、一回りだけど」

と小声でつけ足した。

15歳の俺が九月末生まれで、27歳の織原さんが十二月頭生まれならば——年の差は、一年と十ヶ月となるのだろう。

「一回りには少しだけ足りない——でも、ほとんど一回りだ。

「あの……根本的な質問していいですか?」

「ど、どうぞ」

「なんで、女子高生の格好してたんですか?」

「……大人にはいろいろあるのよ」

核心に切り込む質問に対し、目を逸らしながら気まずそうに言う織原さん。

「そうか。やっぱ、そういうことだよな。」

「ま、まあ、趣味は人それぞれですよね」

「え……ち、違う違うっ！」

納得してフォローを入れた俺に対し、ぶんぶん首を振る。

「私、好きでやつてたわけじゃないからね！」

「あれ? JKのコスプレで街を練り歩くのが趣味ってことなんじゃ」

「違うからっ! ああもう、ちゃんと説明するから、話を聞いて!」

必死の形相で訴えた後、恥ずかしそうに語り始める。

「えっと……なにから話せばいいかな。とりあえず……私が、桐女に通っていたのは本当の話。

もう、十年も前の話になるけど

十年前。

この人が高校時代を過ごしていたのは、十年も昔の話なのか——それはもしかすると、まだスマホが普及していない、プリクラの全盛期だったりするのだろうか。

「高校の友達で、今でも仲がいい子がいてね。雪ちゃんていうんだけど……桃田くんに会った日の前日、雪ちゃんの家に遊びに行つて、家で飲んでたの」

飲んだ、というのは当然お酒のことなのだろう。27歳の織原さんは、アルコールの摂取も許される年齢なのだ。

「久しぶりに会ったから、お酒も話も止まらなくなつちやつて……気がついたら二人ともベロンで、前後不覚な状態だった」

そんな泥酔状態になつたとき、友人の雪さんとやらが言つたらしい。

——姫つて本当に童顔よね。

——あなたなら今でも、女子高生で通用するんじやないの?'

「……そしたら雪ちゃんが、自分の高校時代の制服を持ってきてさ。私もだいぶ酔っ払つてたから、じゃあ着てみよっかなー、つてノリで……」

織原さんが着ていた制服は、彼女のものではなく友達のものであつたらしい。サイズが少し小さそそうだった理由が、これでわかつた。その雪さんという方は、なんというか……織原さんほど豊かではなかつたのだろう。

「ノリで制服を着て、髪やメイクも女子高生っぽく仕上げて……その後の記憶はほとんどない。気がついたら朝で、いつもならとっくに家を出てる時間だつた。大慌てで雪ちゃんちを飛び出して、『今から一回家帰つてスーツに着替えて会社に行けばギリで間に合つ』って考えながらダッシュで最寄り駅の電車に滑り込んで——そこで、やつと自分の格好に気づいたの……」

「両手で顔を覆つて羞恥に悶える織原さん。過去の自分を殴りたくてしようがない、という後悔がひしひしと伝わつてくる。

「もうね……恥ずかしくて死ぬかと思った。なんの羞恥プレイなのよこれは／＼つ、つて一人で頭の中でずっと叫んでた……」

羞恥心が振り切つてしまつたのか、今度は遠い目をして乾いた笑いを浮かべる。

27の女性が、JKの格好で、満員電車……うん、まあ、フルコンボだな。男の俺には想像しかできないけど、なかなかにキツい羞辱なんだろう。

「ただでさえ地獄だつたのに……まさかそこで、さらなる地獄が襲つてくるとは夢にも思わなかつた」

自嘲気味に言う。

尋ねるまでもない——痴漢のことだろう。

「普通に痴漢が怖かつたつてのもあるけど……それと同じぐらい、実年齢がバレたらどうしようつて恐怖がすごかつた……。声を上げて助けを求めるは、痴漢を社会的に殺せたかもしれないけど、そしたら私も其倒れだからね……ふ、ふふふ。なんか、夕方のニュースとかで取り上げられそつだよね。『〇〇線で痴漢事件！ 被害者は女子高生……のコスプレをした27歳の〇L!』みたいな」

「あー……」

まさかそんな裏事情があつたとは。

じゃあ織原さん、あのとき二重の意味で大ピンチだつたんだな。痴漢という犯罪と、JKコスが周囲にバレる不安。たとえ痴漢を捕まえることができたとしても、その後にたぶん駅員や警察からの身分証の提示を求められたりするんだろう。運が悪ければ、会社に話が行つたりするのかもしれない。

それは……うん、軽く死にたくなる羞辱だな。

「もう、どうしたらいいかわからなくなつて、固まつてることしかできなかつた。そんなピンチから私を助けてくれたのが——桃田くんだった」

「…………」

「改めてお礼を言わせてもらうけど……ほんつつとうにありがとうございました。桃田くんのおかげで、

どうにか社会的に死なずに済んだわ……」  
すげえ切実なお礼だった。

本当に心の底から感謝をしているような感じ。

「助けてくれたのが桃田くんで、本當によかった。きみがいなかつたら私は……今頃この街を去つていたかもしれない」

「んな大げさな……。たまたま、ですよ。俺がたまたま見かけただけの話で。俺がいなかつたとしても、誰か他の奴が助けたかもしれないし」

「ううん、違うよ」

織原さんは言う。

優しく、それでいてどこか熱っぽい眼差しで。

「桃田くんだったから、だよ。きみが恥ずかしい思いをしてでも私を守ろうしてくれたおかげで、私は助かつた。JKのコスプレした27歳だつて、バレずに済んだ」

結果論だけど——あのときの俺の選択はどうやらある意味最善手だつたらしい。もしも痴漢を駆員に突き出していれば、彼女には痴漢に続く次の地獄が待つていたのだ。

「桃田くんが、女人のことを思いやつてくれる、優しい男の子だつたから……」

「…………」

正直な話、あの日の救出劇は、あまりいい思い出にはなつていなかつた。

無計画で行き当たりばつたりで、お世辞にもスマートとは言えない解決法だつた。周囲からはいい笑いものにされ、恥ずかしい思いもした。

格好悪かつたなあ、と少し後悔していた——

「すごく格好よかつたよ、あのときの桃田くん」

「織原さん……」

かすかに頬を赤らめた艶っぽい笑みに、吸い込まれてしまいそうになる。

数秒、見つめ合う。

しかし段々と羞恥が湧いてきて、二人とも同じタイミングで顔を逸した。

「と、とにかく、桃田くんのおかげで助かつたの、私」

焦つた声のまま、仕切り直すようにならうに言う。

「どうしてもお礼をしたから、電車を降りてから走つて追いかけて声をかけて……あと

はもう、説明しなくともいいよね。それからはご存知の通り、JKのコスプレをしたままで、桃田くんと会つてましたとさ」

「…………」

「いろいろ大変だつたんだよ？ お弁当を作つた日なんか、会社終わつてから急いで駅の方に行つて、女子トイレで着替えた後にコインロッカーに荷物を預けたりして」

冗談めかして言って、くすりと笑う。

ああ、そうか。織原さんのスーツ姿——どこかで見覚えがあると思つていたけれど、ようやく既視感の正体がわかつた。

弁当箱を届けようと、女子トイレに入った織原さんが出てくるのを待つていたとき、スーツ姿のOL風の女性が出ていくところが見えた。裏事情を知らないせいであるで気づけなかつたけど——あのとき見えたOL風の女性が、織原さんだつたのだ。

JKからOLへと。

仮初の姿から本当の姿へと変貌した、織原姫だつた。

「JKコスで街中歩くのは恥ずかしかつたけど……でも、ちょっとぴり、楽しかつたな」

「……あ。やつぱりそついう趣味が」

「違うつてばっ！ そつじやなくて、桃田くんというのが楽しかつたって意味で……」

即座に否定を叫ぶが、声は段々と尻すぼみになり。

そして、みるみる顔が赤くなつていく。

「……俺といふのが、楽しかつたんですか？」

「そ、そつよつ！ 悪い！」

逆ギレ気味に怒鳴る。俺は思わず笑つてしまいそうになつた。ああ、やつぱりこの人は織原さんなんだな。服装や髪型は変わつてしまつたけれど、表情や仕草はなにも変わらない。俺が好きになつた彼女、そのものだ。

けれど。

穏やかな気持ちとなる俺とは反対に、織原さんの表情は暗くなつていく。

「……楽しかつたよ。若返つたみたいな気がして、学生時代に戻つたみたいな気がして、夢みたいに楽しかつた——でも、もう終わりにしなきや」

もう魔法は解けちゃつたんだから。

と。

どこか決意を感じさせる声で告げる織原さんは、もう笑つていなかつた。温度の感じない、人形めいた無表情となつていて。

「じゃあ……そういうことだから」

強引に会話を打ち切るように言うと、織原さんは鞄から財布を取り出した。

そして一万円札を一枚、テーブルの上に置く。

「ここは私が出すから。大人の私が」

「え……」

「なにか、好きなもの注文して食べてつていいよ。お釣りは……騙したお詫びとして受け取つてください」

「……なつ。ちよ、ちよつと待つてくだ——あつ。す、すいません」

慌てて追いかけようとしたところで、料理を運ぶウェイターとぶつかりそうになつてしまふ。そうこうしているうちに、彼女はもう店の外に出ていた。

追いかけようにも食い逃げになつてしまふので、とりあえずもつた一万円で急いで会計を済ませた。お釣りを握り締めて店を飛び出す。

「待つ……待つください、織原さん！ 織原さん！」

街頭が照らすアスファルトを蹴り、スーツの背中を追いかける。

何度も呼びかけると、彼女はようやく足を止めてくれた。こちらを振り返る。

「……なに？」

表情も声も——ゾッとするぐらい冷たかった。

「なつて……まだ話は終わつてないでしょ？」

「これ以上なにを話すつていうの？」

織原さんは問う。

射抜くように俺を睨みつけて、問う。

「まさか——まだ私のこと、好きだなんて言わないよね？」

悲痛な響きを帯びた声だった。口の端には皮肉めいた自嘲が浮かぶ。

「それ、は……」

言葉に詰まる俺を見て、彼女の美貌を歪ます自嘲と自虐が、より一層深くなる。

きみが好きになつたのは、27歳の私じゃない

「…………」

「きみが好きになつた女の子は、この世には存在しないの」

「きみが好きになつた彼女のこと。」

「俺が好きになつた彼女のことを。」

「同じ年の女子高生と信じて疑わなかつた、織原姫という名前の少女。」

「私が27歳だつてわかつてたら、きみも最初から相手になんかしなかつたでしょ？」 恋愛対象にはならなかつたでしょ？ そうよね……当然よ。きみみたいな高校生からしたら、私なんて、もうおばさんだもんね。ねえ、気づいてる？ 私、きみよりも、きみのお父さんと年が近いんだよ……？」

「ああ、ごめん。責めるつもりは全然ないの。悪いのは全部私の方だから」

「言葉が見つからない。頭がまだ、全然整理できていない。混乱が全く解消されない。グチャになつた頭で、それでも口に出さずにはいられなかつたのは、

「俺達……もうこれで、終わりなんですか？」

未練、だつた。

終わらせたくない。失いたくない。あらゆる理性を振り切つて、そんな感情だけが俺の内側で暴れていた。

「終わりだよ。終わらせるしかないじゃない……だって、15歳のきみと27歳の私じゃ、住む世界が全然違うんだもん」

「そんなこと……。年が一回り違つたぐらいで」「ぐらい？」

織原さんは今にも泣き出しそうな顔で、しかし強い声で言つ。

「わかっていない。全然わかつてないよ。桃田くんは、27歳がどういう年齢なのか、全然わかつてない……」

瞳に深い悲しみを滲ませ、彼女は宣言する。

27歳という年齢の、絶望を——

「27歳はね——アナゴさんと同い年なのよ！」

ボカン、としてしまつた。

まるで予想してない方角からの攻撃に、思考がフリーズしそうになる。

「ア……アナゴさんって、あのアナゴさんですか？　あの、サザエさんの」

「そう。マスオさんの同僚の、アナゴさんよ。彼、公式情報だと、27歳らしいわ」

マジか。

アナゴさん、あの貫禄と声で、27歳だったのかよ。

あの雰囲気はどう考へてもアラフォーだろ。

「……大人になるとね、子供の頃、憧れていたキャラクターより、自分がどんどん年上になつていくの。ナルト、一護、ルフィといった十代の主人公を超えて、いつしかぬくべよりも大人になつっていた。ジャンプ主人公達を追い抜いていく絶望にはどうにか耐えられたけど……アナゴさんが27歳とわかつたときは、さすがにキツいものがあつたわ」

「…………」

「桃田くん、きみは、アナゴさんと付き合えるの？」

いや。

アナゴさんとは付き合えない。

シリアルな顔でなに言つてんだ、この人。

「ほらね、無理でしょ」

いや。

ほらね、じゃねえよ。

どうしよ。これは……ツッコんでいいところなんだろうか。今はシリアルスパートとギャグパート、どっちなんだ?

判断に困る俺を無視して、織原さんは一人話を進める。

「最初から『ウイー』で遊んでたきみと、『スマートアミ』のソフトを一生懸命フーフーしてた私とじや、どうやつたつてわかり合えないのよ……。どうせ桃田くん、アレでしょ?『アドバンス』だって横に長いやつじやなくて、パカパカ折り畳める『SP』の方で遊んでたんでしょう?」

「……俺、『アドバンス』はやつてなくて。携帯ゲームは普通に『DS』から

「さ、最初っから『DS』世代……!」

織原さんは白目を剥むき、大きくよろめいた。

気絶寸前である。

「……も、もうわかったでしょ? 最初から『DS』で遊んでたきみと、思春期を『ロックマンエグゼ』に捧げた私とじや、住む世界が違うの。だからお願ひ。私のことは、もう忘れて」

そう言い捨てるに、織原さんはこちらに背を向けた。

遠ざかっていく背中を、やはり俺は見送ることができなくて。

「ま、待つて——」

「——あーあ! わつかんないかなあ!?」

未練がましく呼び止めようとすると、突如、呆れ果てたよくな叫びが響いた。振り返った彼女は、心底不愉快そうな顔をしていた。見たこともない表情だ。

「こつちが気を遣つてるのわかんない? いい加減、空気読んで帰つてくれないかな?」

刺々しい口調で、突き放すように言う。

「私、きみのことなんてなんとも思つてないから。反応が面白かったから、JKのフリしてからかつてただけ。こつちはさ、大人の女なのよ? 自分でお金稼いだこともない高校生なんて、最初つから男として認識してないの。ちょっと優しくしたぐらいで、勘違いしないでよね」

小馬鹿にするような言葉は止まらない。

悪女の笑みを浮かべて、俺達の思い出を汚していく。

「ていうか、告白が『ラウラン』とかあり得ないから。ダサいにもほどがある。こつちは大人の女なんだから、もつとムードつてものを考えてくれないとね。たとえばほら、遊園地を貸し切つて、お城の前で花束持つて現れるとかさ。大人の女は、そういうのに気が利く男じやない」と——

「……なんで、そんなこと言うんですか」

俺は言う。

痛い。胸が痛い。痛くて痛くてたまらない。

彼女の台詞で心を傷つけられた——わけじやない。

「なんで——嘘つくんですか？」

彼女にこんな台詞を言わせてしまうことが、辛くて辛くてたまらなかつた。

「な……う、嘘じや」

「だつたら、なんで泣いたんですか？」

ハツと織原さんは息を呑む。

「俺が告白したとき、なんであんな風に泣いたんですか」

本当に申し訳なさそつに、心から罪を悔いるかのようだ。

今ならあの涙の意味がわかる。あの瞬間、織原さんは深い自己嫌悪に陥つたのだろう。俺を惚れさせてしまつたことに、激しい罪悪感を覚えたのだろう。

「無理して、悪女みたいな演技しないでください。織原さんがそういう人じゃないつて、俺はわかつてゐるから」

「……きみに、私のなにがわかるの？」

「わかりますよ、好きになつた人だから」

俺は言つた。

出会つてまだ一週間かそこらで、相手のことなんて知らない方が多いだろう——でも、知つてゐる。織原さんが他人を誑かして楽しむような性悪女ではないことぐらいは、ちゃんとわかつてゐる。

俺を騙したことで心を痛めていたことも、十分過ぎるほど伝わつてゐる。

無理をしたような悪女の演技はあまりにわかりやすくて——俺から嫌われようとしていることがあまりに明白で、反論せすにはいられなかつた。

彼女の優しさだといつことはわかつてゐる。

でも俺は、そんな嘘に騙されるほど子供ではなく——そして、そんな嘘に騙されてあげられるほど大人ではなかつた。

大人でも子供でもなく、大人でも子供でもあるような、15歳の高校生が、俺だつた。

「織原さ——」

言葉が止まる。

彼女が——泣いていたから。

すっかりと暗くなつた夜の世界で、外灯の光を浴びながら、静かに静かに涙を零す。

泣いてゐる顔を見るのは、これが二度目だつた。

「やめて……やめてよ、桃田くん……お願いだから、これ以上、私に入つてこないで」

ああ。

また、だ。

好きになつた人を、守りたいと思つた人を、俺のせいで泣かせてしまつてゐる。

どうして、こうなつてしまふのだろう——

ボロボロと涙を零しながら、鼻をすりながら。

それでも織原さんは、まっすぐ俺の方を見た。

「……お願い、桃田くん。こんな変なおばさんことはもう忘れて。もっと普通に、同じぐらいの年の子と、ちゃんと普通の恋愛をして。大丈夫。桃田くんならきっと、すぐにかわいい彼女ができるよ。だから」

ぱいぱい。

と。

そう言つて織原さんは——笑つた。涙でグチャグチャになつた顔で、それでもとびきりの笑顔を見せてくれた。悲しみも痛みもなにもかもを押し殺して、ただただ俺の幸福な未来だけを祈るような、聖女のように優しく、気高く、美しい笑み。

背を向けて、俺の前から去つていく。

動けない。足が縫いつけられたように動けない。どれだけ冷たくされても、どれだけ罵倒されても追い縋ろうと思っていたけれど、あんな笑顔を見せられてしまつては、もうなにもできない。

俺は天を仰ぎ、必死に涙を堪える。

夜空に浮かぶ月は、ムカつくぐらい綺麗きれいだった。



「27つ……ババアじやねえか」

放課後の空き教室。

世の中にあるアラサー女性の全てを敵に回すような台詞を言つたのは、もちろんウラだった。死んだ魚のような目をまんまるにして驚いている。

隣のカナもまた、同じような驚き顔だ。

「さすがに驚いたね。桐女の制服で歩いてるどこか別の高校の生徒だとばかり思つてたけど、まさか『はるみ生活』で働くOLさんだったとは」

言いつつ、カナは手元のプリクラを眺める。俺達一人のプリクラだ。織原さんが落としていた分も合わせて、なし崩し的に俺が一人分所有している。

「これ見ると、とても27歳には見えないなあ。普通に……いや、かなりかわいい女子高生にしか見えない。プリクラつてことを差し引いても、かなりの童顔だね」

「けつ。女は化粧でどうともなるからな。怖えー怖えー」

皮肉げに言つた後、ウラは俺の方を見て笑う。

「でも——助かつたな、モモ」

「え……」

「危く、一回りも年上のババアと付き合つちまうところだつたんだろ。相手が良識ある大人

でよかつたよ。もしも若い男を弄んで詭かそうとするカス女だつたら、今頃なにされ  
てたかわんねえぜ？」

助かつた——そういう見方もあるのか。

あるいは、そつちが普通の考え方もあるのか。

これがもし男女が逆で——15歳の女子と27の男が恋愛関係になつたという話になれば、否や  
が応でも犯罪っぽい空気が発生する。たとえそれが純愛だつたとしても、世間に理解してもら  
うことは難しいだろう。

男女が逆になつたところで——本質的には同じだ。

成人女性と未成年男性が男女の関係になることは、法律上は淫行に当たる。

あるいは俺も、今のウラの立場だつたら、同じことを言うのかもしれない。

友達が街で出会つた女性に惚れて、相手が実は27歳の社会人だとわかつて、それでも構わず  
告白して玉碎したとなれば——助かつたな、とそう言うのかもしれない。万が一にも付き合  
うようなことになれば、どれほどの困難が押し寄せるか想像もつかないから。

昔の俺ならば、たぶんそう言つただろう。

彼女と出会ひ前のお俺ならば——

「まだ、未練タラタラつて感じだね、モモ」

見透かしたような目をして、カナガが言つた。

「まだ姫ちゃんのこと……あ、もう姫ちゃんなんて呼べないか。訂正しよう。まだ織原さんの

こと、全然諦めきれてないみたいだ」

「は？ おいおいマジかよ、モモ。相手、27だぞ。アラサーだぞ、アラサー。学園ラブコメ  
だつたら、バカの一つ覚えみたいに『婚期が、婚期が』つて騒いでるだけの先生ポジにな  
る年齢だぞ？」

だからなぜお前は不特定多数を敵に回す発言をする。かわいい先生ヒロインだつて世の中に  
はたくさんいるぞ。

「……別に、未練つてわけじやねえよ  
俺は言う。

「ただ、まだ頭が全然整理できていないだけだ」

ふわふわとした夢見心地で、地に足がついてない感じ。

昨日、全てが終わつたはずなのに——関係は完全に消滅してしまつたはずなのに、それを  
まるで受け止められずにいる。

「モモ。僕にしては珍しく善意百%で言うけどさ——やめておいた方がいいよ」

カナは爽やかな笑みを消し、いつになく真剣な顔となつていた。

「彼女のことは、早く忘れた方がいい。悪い夢でも見たと思つて——いい夢でも見たと思つて、早くこつちの世界に帰つておいで」

「…………」

「モモのためだけに言つてるんじゃないよ。織原さんのためにも、彼女のことはさつさと忘れて次の相手を探した方がいいと思つ」

淡々と、静かな声で論すように続ける。

「27歳つていつたら、大学卒業後に新卒で働き出したなら、もう入社六年目……立派な社会人だ。カート・コバーンやジミ・ヘンドリックスなら、一時代を築いてすでに死んでるような年齢だよ?」

「……伝説的なミュージシャンと比較されてもな」

「要するに、僕らみたいなガキとは根本的に住む世界が違うつてこと。付き合つたつてお互いのためにならないと思つ。人によつては、結婚や出産を考え出す年代だしね。なまほんか生半可な気持ちで近づくべきじゃないよ」

結婚。出産。

遠い国の言語を聞かされている気分だつた。薄つすらとは理解していながら、俺にとつてはまだ先の事柄だと思つ、考えることすらしなかつたこと。

「つーかシンプルに、一回り年上つて、ありえねえだろ。いつまでも外見が変わらないロリババアとはワケが違うぜ?」

ウラが口を開く。

「確かに織原は、今は若くて綺麗に見えるかもしれないけど、モモより早くババアになつてくれんだ。いつまで付き合う気かは知らねえけど、お前が20歳になつたら32歳、お前が30歳になつたら42歳……年の差は一生縮まらない。今のモモは恋愛脳で舞い上がつてゐるから『愛があれば年の差なんて!』って考へてるかもしれないけど、いつかその熱が冷めたとき、お前は自分より12も年上の女を、どう思つのかな?」

ウラも、カナも、いつになく厳しい口調だつた。

その厳しさを——ありがたいと思つ。

他人の恋愛をけしかけるのは簡単だ。「絶対いけるよ!」「あの子も絶対お前のこと好きだから!」なんて無責任に相手を応援するのは、本当に簡単だ。

でもこいつらは、真剣に俺のことを考へてくれている。俺から嫌われることも覚悟した上で、俺の身を案じてくれている。

「……サンキューな、二人とも。お前らの言うとおりだ。おかげで目が覚めたよ」

俺がそう言うと、二人は<sup>あんご</sup>安堵したように表情を緩めた。

「よしモモ。今日はパーッと遊ぼうぜ。僕んちでひたすらゲームしてよう。ソシャゲやつて据

「え置きゲー やつてカードゲームやつてボードゲームやろう」「バーツと遊ぶがインドア過ぎるでしょ。モモ、こういうときは次の出会いだよ。合コンしよ  
うよ、合コン。僕が本物の桐女の子を集めてあげるから」「ふざけんな、モモは僕とゲームすんだよ」「なに言つてるの？ モモは僕と合コンするんだ」「ゲームっ」「合コンっ」「合コンっ」

「……落ち着けよ、お前ら」なぜか言い争い始めた二人を、溜息混じりに制す。  
「合コンは……やめとくよ。そんな気分じゃないからな」「俺は言う。  
「とりあえず今は、ゲームだな」

名前を呼ばれたことに気づいて、ハツと顔を上げる。  
後輩の小松さんが心配そうに私の顔を覗いていた。  
「大丈夫ですか？ なんかボーッとしてましたけど」「ご、ごめんね。なんでもないから大丈夫」「これ、頼まれてた資料、まとめておきました。目を通してください。あと、体調不良なら言つてくださいね。織原さん、ここ最近、ちょっと調子悪そうですし」「う、うん。心配してくれてありがとう」

小松さんは自分の机に戻る。

彼女は確かに、今年で23歳だったかな。緩くパーマを当てた茶色い髪に、白を基調としたオシャレなオフィスカジュアルの装い。毎日コーディネートを考える手間とブレッシャーに負けてスーツで出勤している私とは違い……なんていうか、キャピキャビして。私が男だったらああいう子に惚れるなあ、って思う。

「眩しい。若さが眩しい。

23歳の女の子を見ていても、若さが眩しくて目が眩みそう。

15歳なんて、もはや太陽そのものだ。

手が触れる距離まで近づけば、身も心も焼き戻され、ドロドロに蕩けてしまつ——

え置きゲー やつてカードゲームやつてボードゲームやろう」「バーツと遊ぶがインドア過ぎるでしょ。モモ、こういうときは次の出会いだよ。合コンしよ  
うよ、合コン。僕が本物の桐女の子を集めてあげるから」「ふざけんな、モモは僕とゲームすんだよ」「なに言つてるの？ モモは僕と合コンするんだ」「ゲームっ」「合コンっ」「合コンっ」

「……落ち着けよ、お前ら」なぜか言い争い始めた二人を、溜息混じりに制す。  
「合コンは……やめとくよ。そんな気分じゃないからな」「俺は言う。  
「とりあえず今は、ゲームだな」



「織原さん、織原さん……織原チーフっ」「え。は、はいっ」

「…………」

顔を上げて、改めてオフィスを見渡す。

国道に面したビルの三階。ガラス張りの窓からはそれなりの景色が楽しめるけど、五年も働いてればいい加減見飽きてくる。パソコンが置かれた机がずらりと並び、椅子の色はなぜかアップルグリーン。多くの同僚達が、忙しく自分の業務に従事している。女性が多い職場なせいか、なにかとオシャレな小物が多く、オフィス全体が華やいだ雰囲気に包まれている。

ここが、私の職場。

ここが、私の現実。

二年前からマークティング事業本部に配属され、今では一つのチームのチーフを任されている。チーフといえば聞こえはいいけれど、結局はただの中間管理職。それもかなり下つ端の方の。やりたい人が他にいなかつたから私がなつただけ。給料は大して上がらないのに責任と仕事をばかりが増える、やーな立ち位置である。

眼鏡越しのオフィスは、いつもとなにも変わらない。

それなのにどうしてか——今は少しだけ、色褪せて見えてしまっ。

「…………」

桃田くんと最後に会つてから、もう一週間が経過していた。

社会人である私はその後も毎日変わらず、仕事に終始していた。恋愛のあれこれで落ち込ん

だぐらいで会社を休むわけにはいかない。  
と、頭ではわかっているのだけど。

実際にはさっぱり割り切れない。就業中も上の空になつていてることが多くて、さつきみたいに体調不良を心配されたことは、一度や二度じゃない。

「……しつかりしなきや」

誰にも聞こえないよう、小声で呟く。ヌルくなり始めたコーヒーを一気に飲み干し、パソコンの画面に集中。目の前の仕事に没頭する。

私は傷つく資格も落ち込む資格もない。

悪いのは全部私なのだから。

私の軽はずみな悪ふざけのせいで、一人の男の子を深く傷つけてしまった。

許されることではない。一生後悔しながら生きていこう。

もう、夢は終わつた。

もう、魔法は解けた。

これから先は、ずっと現実だけが続いていく。

昼の休憩に、私は会社の外に出た。

うちの社員の昼食模様は人それぞれで多種多様。作ってきたお弁当を食べる人もいれば、外に食べに来る人もいる。オフィス街だけあって飲食店は充実しているし、最近は『ウーバーイーツ』なる宅配サービスが女子社員の中では流行っている。

私は節約と健康のために自分でお弁当を作るようにしているけれど、今日は人との約束があつた。

会社の近くにある、シックな雰囲気と野菜のパスタが売りのカフェに入る。昼時の混み合つた店内を見渡していると、

「姫っ！ こつちよ！」

店内の奥の方で、黒髪の美人が私の名を呼んだ。カア、と頬が熱くなるのを感じた。私は小走りで駆け寄つて、対面に腰掛ける。

「もう、雪ちゃん……大声で下の名前で呼ばないでよ！」

「あら。ごめんなさい、うつかりしてたわ」

素直に謝つてくれるけど、あまり表情は変わらない。艶やかでサラサラな長い髪と、新雪みたいに真っ白な肌。顔立ちは精巧に作られた人形のように美しく、その凛とした佇まいは一輪の薔薇を思わせる。クールビューティーな出で立ちは高校時代からなにも変わらず、とても一児の母とは思えない。

井口雪。

もとい——今は結婚して、白井雪。

大学卒業後は銀行員をやつていたけれど、結婚と同時に辞めて、今は専業主婦。高校時代から親交がある、私の友人の一人。その類まれなる美貌ゆえ、学生時代から男女問わずに人気が高かつた。地味に地味に生きていた私は対極に存在するような相手だったけど、いろいろと奇妙な縁があり、今でも定期的に会つている。

「未だにコンプレックスなのね、その名前」

「当たり前でしょ……ていうか、年々コンプレックスが酷くなつてるよ」

姫つて。

そんな名前が許されるのは、せいぜい十代だろう。

アラサーにもなつて姫つて……ねえ？

「オタサーの姫ならぬ、アラサーの姫というわけね」

「……ごめん、雪ちゃん。あんまり面白くない」

「あら残念」

美人過ぎて近寄りがたい雰囲気を纏つている雪ちゃんだけど、意外としようもない冗談を

言つたりもする。外見から誤解されやすいけれど、中身は意外とユーモラス。

「私……このままじゃお婆ちゃんになつても姫なんだよ？」老人ホームに入つたら、『姫お婆ちゃん、ご飯ですよ』とか言われちやうんだよ？ はあ、鬱だわ」

「同情するわ。親はもっと、考えて名前をつけるべきよね」

「雪ちゃんはそこで、物憂げな溜息を漏らす。

「最近、地域の子育て支援センターなんかにも参加してるんだけど……冗談みたいな名前の子が多すぎてゾッとするわ。あの親達は、子供をペットかなにかと勘違いしてるのかしら？ 根本的に想像力が欠如しているのよ。いずれ子供が大人になり、最後は老人になるということを、全然想像できていない」

棘のある言葉だったけど、名前にコンプレックスがある身としては同意したい。

ただ……一つだけ物申したいこともある。

「雪ちゃん、そういえば、今日は子供はどうしたの？」

「真華龍なら、お母さんに預けてきたわ。たまには孫にも会わせてあげないとだからね」

「……そつか」

真華龍——雪ちゃんの子供の名前。

最近一歳になつたばかりの男の子で、私も何度か会わせてもらつたことがある。もうメチャクチャかわいい。よちよち歩いて『まんま、まんま』って言う様子がブリティ過ぎて、動画や写真を撮りまくつて。

人の子だけど、目に入れても痛くないぐらいかわいい……だけど、名前は真華龍。

言つちやなんだけど、めつちやベットっぽい名前じやない？

「改めて思うけど……真華龍くんつて、だいぶ攻めたネーミングだよね」

「ええ。ギリギリいっぱいを攻めたと自負するわ。よくこんな個性的でセンスフルな名前を思いついたと、自分で自分を褒めたい気分よ」

私の感覚ではギリギリいっぱいどころか、投げたボールがスタンンドに直行したレベルの大暴投な気がするけど……まあ、なにも言うまい。

雪ちゃんつて昔から、こんな感じなのよねえ。

東北一偏差値が高い大学に入るくらい頭いいのに、なにかが致命的にズレている。

高校時代は常に学年トップの成績を収め、東北一の大学にも余裕で入学。卒業後は日本有数のメガバンクに総合職として入社。

しかし、たつた一年で、寿退社して、それ以来専業主婦。

結婚も寿退社も、傍から見れば信じられないくらいの即断即決だったので、当時はいろいろ心配もしたけど、こうして今、立派に専業主婦をやつてている彼女を見ていると、心配は全部杞憂だつたのだと実感する。

「……はあ」

「どうしたの？ 溜息なんかついちやつて」

「いや……なんか、雪はちゃんとしてるなあ、って思つて、結婚して、子供もいて、なんていふか……ちゃんとしてる気がする」

27歳になると、同級生がどんどん結婚していく。子供がいる人も多い。すでに離婚を経験してシングルマザーとして生きている知り合いもいる。

「それに比べて、私はなにやつてるんだろう……」

「ほんとよね」

悲しいことに雪ちゃんは慰めてくれず、思い切り同意してきた。

「JKのフリして、15歳の男子を誘かしてるんだもの。本当になにをやつてるの、あなたは？ いい年して恥ずかしいと思わないの？ ご両親に申し訳ないと思わないの？」

「う、うう～～……は、半分ぐらいは雪ちゃんのせいでしょう」

あの日――授乳期間が終わって飲酒が解禁になつた雪ちゃんは、相当なハイペースで飲んでいた。旦那さんは子供を連れて実家へと帰り、「たまには育児も主婦仕事もお休みして、のんびりしなよ」と言ってくれたらしい。

久方ぶりの飲酒と休日を満喫する雪ちゃんに付き合つた私は、大して強くもないくせに相手に合わせてゲビゲビ飲んじゃつて――それが後に続く、奇妙な日々の始まりだった。

「もうお別れを告げたのよね？ その、桃田薰くんとやらには」

「……うん」

注文していた料理が、ようやく運ばれてくる。お店の看板メニューである、日替わりのパスタ。キャベツとシラスがふんだんに混ぜ込まれたパスタを食しながら、私は雪ちゃんに説明した。



私と彼の、事の顛末を全て。

「そう。結局、全部打ち明けてしまつたのね」

話を聞き終えた雪ちゃんは、感情の読めない無表情のまま、じつと私を見つめる。

「お疲れ様、姫。辛かつたでしょう」

「雪ちゃん……」

「——なんて言わないからね」

視線が、氷でできたナイフみたいに鋭くなる。室温が一気に下がった気がした。蛇に睨まれた蛙みたいに、私は硬直してしまう。

「私は何度も言つたわよね？ 今すぐに彼と関わることはやめなさい、って。取り返しのつかないことになるから、つて」

「……つ」

桃田くんに出会った日から、私は雪ちゃんに相談を持ちかけていた。「ど、どうしよう雪ちゃんつ！ JKの電車が痴漢で男の子が超格好良く助けてくれたけど、私はJKだったつ！」と、大慌てで変な電話をしてしまつた。

「なにもかもあなたが悪いわよ、姫。お礼までならないと思つけど、デートなんかするべきではなかつた。まして自分から誘うなんて……愚かにもほどがあるわ」

私はなにも言い返せない。

デートのきつかけとなつた、私が預けっぱなしにしていたお弁当箱——

本当は——気づいていた。

気づいていたけど、忘れた振りをした。並んで歩きながら、このまま彼が気づかなければいいのに、と心の中で願つていた。祈るように願つていた。

シンデレラの靴と同じ。

忘れものがあれば、次に会うための口実になると思つたから。

「こうなることは目に見えていたわよ。あのJKコスをしたあんたと一緒にデートなんかしたくら、男なら誰でもコロつと落ちるに決まつてるから

「……そ、そんな、まさか」

「姫はモテた経験がなくて、男性経験も皆無だから、自分の魅力に自覚がないのよね。まあ、しようがないとも思うけれど。学生時代のあなたは、地味でオタクで三つ編みで、そしてデブだつたし」

「デデデツ、デブじゃないから！ ちょっと重心が安定してただけだから！」

必死に反論するも、虚しいだけだつた。

高校時代の私は、雪ちゃんの言うとおり地味でオタクで三つ編みで、そして……ちょっとぴりぽつちやりだつた。今だと『陰キャ』っていうのかな？ クラスの隅っこでいつも本（ゲームの攻略本）を読んでいた。女友達はいたけれど、同年代の男子となんか一度も話さずに三年間

が終わつた。

ひたすら家でゲームをやつてゐる、灰色の青春だつた。

恋愛なんて自分には縁遠いものだと思つて、諦めていた——でもそれは、無関心とは違う。本当は興味があつた。街を歩く学生カップル達に、ずっと憧れていた。

恋がしたいと、ずっと思つていた——

「『振り袖だけは太つたまま着たくない』といつてダイエット始めたときはどうせ無理だと

思つてたけど、よくやり遂げたわよね」

「おかげさまで」

成人式前のダイエットには雪ちゃんにもかなり協力してもらつた。体型は今も、どうにか維持している。

「お腹周りはすつきりして綺麗なくびれができるのに、胸だけは一切痩せなかつたのよね。本当に、姫ましいわ。なにその犯罪級のおっぱい」

「や、やめてよ、もうっ」

じつと胸を睨まれたので、慌てて隠す。

いやあほんと、おっぱいだけは全く痩せなかつたんだよね。不思議不思議。

「桃田くんは、そんな胸を至近距離で見せつけられたわけでしょ。そりや惚れるわよ。JKの格好してそのおっぱいをブルンブルンさせられたら、思春期の男子にはたまつたもんじゃな

「自覚しなさい、姫。あなたは——15歳の男子を誑かしたのよ。あなたの持つ女としての魔性で、男心を弄んでしまつたの」

糾弾の言葉が胸を射抜いた。

「あなたは自分の学生時代のコンプレックスを払拭するため、桃田くんを利用したのよ。地味で冴えなかつた青春時代をやり直すために、彼の純情を利用した

「そ、そんな——」

違う、と言いたかつた。言えなかつた。

雪ちゃんの言うとおりのなのかもしれない。

あの日曜日のデートは——私が高校時代にやりたってもできなかつたことをやつただけだつた。二人で制服のまま出かけて、街をぶらぶらして、安価なチエーン店で一緒にハンバーガーを食べて、『ラウラン』で遊んで、『プリクラ』を撮つて——

本当に楽しかつた。

青春時代をやり直しているみたいで、本当に楽しかつた。

そう——全ては、私の自己満足だ。

私は、私のことしか考えてなかつた。

「だつて……だつて、しようがないじゃない——好きになつちやつたんだから」  
言い訳するみたいに、私は言つた。

好き。

桃田くんが好き。

彼は私に一目惚れしたと言つてくれたけど——それはこつちの台詞だ。

一目惚れだつた。

ていうか。

あんな格好いい真似まねされて、惚れないわけがないでしょ。

絶体絶命のピンチから私を救い出してくれた彼が、私には王子様に見えた。

格好よくて、優しくて、一瞬で恋に落ちてしまった。

「こんな気持ちになつたの、生まれて初めてで……頭の中が桃田くんのことだけでいっぱいになつちやつて、もうどうしていいか全然わからなくて——でも、絶対に付き合えないことだけは、ちゃんとわかつたから……」

相手は15歳の少年。

27歳の私と結ばれるはずもない。結ばれていいはずもない。

私の初恋は——禁断の恋だつた。

ロミオとジュリエットのように、禁断だつた。

「だから……せめて、少しだけでいいから、一緒にいたかった。恋人っぽいこと、してみたかった……一回だけデートしたら、きちんとお別れして、もう二度と会わないようにしようと思つてた」

——私、一生の思い出にするね。

叶わぬ初恋ならば、せめて思い出が欲しかつた。一度でいいから、一人で街を歩いてみたかった。学生っぽいデートをしてみたかった。それさえできたら、もう思い残すことはない。この気持ちは心の奥底にしまい込んで、いつか風化するまで必死に隠しておこうと決めていた。それなのに——

「それなのに、最初で最後のつもりだつたデートで、熱烈な告白をされちゃつたというオチね。今時の男子にしては、なかなか行動力があつて男前なのね、桃田くんつて。さすが姫が惚れるだけあるわ」

痛烈な皮肉を投げつけられ、私は返す言葉もない。

——好きです、織原さん。

本当に嬉しかつた。天に昇る気持ちだつた。好きになつた相手が、自分を好きでいてくれた。好きつて気持ちを言葉にしてくれた。この世にこれ以上の幸福はないと思つた。

「…………」  
やつと涙が止まつた後……さすがに周囲の視線が気になつたので、私達はそそくさとカフェから出た。雪の方は全然平気そうだつたけど、私が無理。あーあ、しばらく来られないなあ、このカフェ。  
雪と別れて、会社へと戻る。

さあ、午後からは気合いを入れて頑張ろう。月末の企画会議に向けた資料作りと、新商品に関する市場調査、営業部に渡すデータ作成、取引先とのスケジュール調整、チームメンバーにもきちんと仕事を振り分けなきやならない。ああ、そうそう、来週太田さんが育休を終えて帰つてくるから、彼女用のマニュアルも作つとかないと。  
こうして仕事に忙殺されていれば——いつかは桃田くんのことも忘れられるだろうか。

でも。

それ以上に悲しくて辛くて、罪悪感で心が押し潰されそうだった。

「…………雪ちゃんの言うとおりだよ。私は桃田くんのこと、悪戯に弄んで、傷つけただけだった。自分のことだけで手一杯で、相手のことなんかなにも考えてなかつた。雪ちゃんに言われたとおり、とつとと彼の前から去るべきだつた……」

そうすれば桃田くんも、私なんかに振り回されることはなかつたのに。あんなにも優しくて男らしい少年の心に、私は深い傷を与えてしまつた——零れそくになる涙を必死に抑えていると、雪ちゃんがいきなり席を立つた。なにも言わずに私の隣に座ると——ギュ、と抱きしめてきた。

「え、な……ゆ、雪ちゃん?」

「おー、よちよち。つらかつたでちゅねえ」

急に抱き締めてきたかと思えば、赤ちゃん言葉を使い出した。普段からは想像もつかない甘い声で囁きながら、回した腕で頭を撫でてくれる。

「よちよち。姫ちゃんは、いい子でちゅよー」

「…………なに、それ? 私、真華龍くんじやないよ?」

「赤ん坊と一緒に、今のあなたは。おー、よちよち。だいじょうぶでちゅよー」

痛いの痛いのとんだけー。

残業が少ないのが、うちの会社のいいところ。  
大きな会議や特別な業務、もしくは誰かが大失態でもやらかなさい限り、大体は定時に帰れ



雪のおかげで少し気持ちが軽くなつたけれど、心はまだ晴れない。未練と罪悪感が全身を雁字搦めにして、足取りを重くする。

ふと——最近よく言われる台詞が頭をよぎる。

『いつか白馬に乗つた王子様が現れると思ってるの?』

27にもなつて彼氏もなく、そして彼氏を作る努力もしていないと、親や友達からよくこんなことを言われた。

現実には王子様なんていない。自分から動かなきや、絶対に彼氏や結婚相手なんか見つからない。そんなニュアンスの皮肉なんだと思う。でもね、みんな。

王子様、現れたよ。

なんの努力もしない私のところに現れて、颯爽と私のことを助けてくれて、しかも私なんかのことを『好きだ』と言つてくれた。親や友達からよくこんな

優しくて恰好よくて男らしい、最高の王子様。

でも、残念ながら、一回りも年下だったけど。

ああ——桃田くん。

あなたはどうして、15歳なの?

私はどうして、27歳なの?

王子様、現れたよ。

もしも私が15歳の高校生だったなら。

もしもあなたが27歳の社会人だったなら。

私達はなんの障害もなく、一緒になれたのかな。

そして二人はいつまでも幸せに暮らしましたとさ——という締めの文句で終わるような、ありきたりな物語を歩むことができたのかな?

「……う

あー、まずい。また泣いちゃいそう。最近、いい加減泣きすぎだ。この一週間、毎晩一人で晩酌しては号泣し、気がつけば朝という最高に自堕落な生活をしているのに、ちつとも涙は枯れてくれない。

ハンカチを取り出そつと鞄を開き——そこで、気づいた。  
サイレンントモードにしつばなしだつたスマホに、メッセージが届いてくる。

一週間ぶりの、桃田くんからの連絡だった。

る。友達からは「羨ましい」「いい会社だね」って言われるけど、定時で帰れる会社が『いい会社』と呼ばれるこの国は、果たして大丈夫なんだろうか。

会社を出た私は、指定された場所へと向かつた。

一秒でも早く駆けつけたいという気持ちと、できることなら会いたくないという気持ちが絡まり合い、結果として競歩と牛歩をランダムに繰り返すような、実際に気持ち悪い歩き方をしてしまう。

そうしてたどり着いたのは——駅から少し歩いたところにある、高架下の公園。

ベンチと砂場ぐらいしかない、少し寂れた公園だ。

出会った日の翌日に、彼が私のお弁当を食べてくれた場所。

いつの間にかすっかり日が暮れていて、ポツポツと点在する外灯だけが、夜の公園を照らす光源となる。

薄暗い景色の向こうに、桃田くんが見えた。

ベンチに座る彼が目に入った瞬間、ズキリ、と胸が痛む。自分にはこんな痛みを感じる資格などないとわかっていても、切なさで胸が張り裂けそうになつてしまつ。

「……」

ギュ、と唇を噛み締めた。ちゃんとしろ、私。毅然としてなきやダメだ。ほんの少しでも未練がある素振りを見せちゃいけない。とつぶに吹つ切つて前に進んでいる——そんな大人の

「こんばんは」と素つ気なく言った。

できる限り、冷たい声で。

「織原さん……こんばんは。お久しぶりです」

桃田くんは私の方を見ると、嬉しさと気まずさが絹な交ぜになつたような、複雑な表情を浮かべた。

「来ないかと思つてました。来てくれて、ありがとうございます」

「別に。来なきやいつまでも待つてていうから、仕方なく来ただけだから」

感情を押し殺し、必死に平静な声を出す。

「それで——用事つてなに?」

「お金のことです」

桃田くんは言つた。

「こないだファミレスで、織原さん、一万円も置いてつたじゃないですか」

「ああ、そのこと」

今日はまさか、そのお金を返すために私を呼び出したのだろうか。律儀な桃田くんならありえそうだけど、なんだか拍子抜けした気分。少しがつかりしてしまい——がつかりしている自分がいたことに驚く。

恥ずかしいことに、情けないことに、私はまだこの子になにかを期待していたらしい。

ありえるはずもないのに。

私達二人の間になにかなんて、ありえるはずもないのに。

「あれは迷惑かけた慰謝料って言つたでしょ？ 返してくれなくとも大丈夫だから。なにか好きなものでも買って」

「はい。だから——好きなもの買いました。一応、その報告しようかと思つて」

「……え、あ。そうなの？」

意外。てっきり返してくる流れなのかと思つたら、もう使ってたなんて。

「あのお金で、ゲーム買いました」

「ゲーム……？」

「この一週間、ずっとゲームだけやつてました」

「そ、そ？」

「もう……」

別にいいんだけど。あげたお金をなにに使おうが勝手だけど。私がこの一週間、大好きなゲームも手につかないぐらい落ち込んでたことと、桃田くんが一人で楽しくゲームを満喫してたことは、ちっともちつとも関係ないことだからどうでもいいんだけど……もうくつ。

身勝手な怒りにとらわれてしまふ私だったけれど、

「このゲーム、ずっとやつてました」

桃田くんがブレザーのポケットから取り出したものを見て——息を呑む。

な。

な、な。  
なにこれ、すつごく懐かしい！

ノスタルジーの花が胸いっぱいに咲き誇る。

これは……制服のポケットにも簡単に入るぐらい収納性に優れた小型のこれは——

「『ゲームボーイアドバンスSP』……！」

桃田くんが見せてくれたのは、とっくに製造が中止されている前時代のゲーム機だった。『アドバンス』の上位機種として発売されたハード。液晶 자체が光るフロントライト機能が当時は大変画期的で、暗いところでも快適にゲームがプレイできた。あと、電池じゃなくて完全

充電式つていうのも、「ええ～つ、もう単3電池買わなくていいの!」と感動した記憶がある。ハイスペックでナイズデザインなハードなんだけど、一年後くらいに『DS』が出てきたやつで、すぐに市場から消えてしまったイメージがある。

「ど、どうしたの、これ? なんで桃田くんが、こんな懐かしいものを……」

「買つたんです。『ロックマンエグゼ』、やつてみたくて」

「パカ、とSPを開く。

電源を入れると……すごく懐かしいメロディーが聞こえてきた。うわあああ。懐かし過ぎて涙が出てきそう。はあ、『無印』のオープニング画面だ。フロントライト機能がある『SP』だから、こんな薄暗い屋外でもしっかりと画面が見えるよお……。

「この一週間、寝る間も惜しんでやつてて、一応クリアしました。いやあ、メチャクチャ面白かったですね! 最初は昔のゲームだと思ってナメてたところもあつたんですけど、すげえハマつちやいました。9マス対9マスという独自のフィールドと、チップを用いたバトルシステムが本当に楽しい。あとストーリーもすこかつたなあ。最初は小学生の主人公が小さな事件解決するだけだったのに、段々と世界を巻き込む壮大な話になつてつ……。まさかロックマンの正体が(ネタバレ)だつたなんて」

「嬉々として、本当に楽しそうに語る。わかるわかる。そうそう、すごいの、『エグゼ』は本当に面白いの。私の青春そのものなの!」

「俺、ロックマンなんて、『スマブラ』でしか知らなかつたんですけど、こんなゲームも出てたんですね」

「あー、『スマブラ』のロックマンは本家のロックマンだから、またちょっと違うんだけどね。『エグゼ』は割と外伝的な作品で——じゃなくて」

「あまりの懐かしさにテンションが上がってついつい語り出しそうになつてしまつたけれど、どうにか自制して話の筋を戻す。

「どうして桃田くん? どうして、こんな古いゲームを……」

「織原さんがハマつたゲーム、やつてみたかつたんです。中古屋探し回つて、どうにか1から6まで全部揃えたんで、これから順番にやつてこうと思います」

「……なん、で? なんで、そんなこと」

「織原さんに——少しでも近づきたかつたから」

「えつと……織原さん、言つてたじやないですか。春学期を『ロックマンエグゼ』に捧げただけでスリーブモードになつたりはしないので音楽が鳴り続けた。慌ててスイッチを下げる電源を落とす桃田くん。『DS』世代らしいミスだったた。

「えつと……織原さん、言つてたじやないですか。春学期を『ロックマンエグゼ』に捧げただけでスリーブモードになつたりはしないので音楽が鳴り続けた。慌ててスイッチを下げる電源を落とす桃田くん。『DS』世代らしいミスだったた。

「な、それ……？」

私のことを、知ろうとしてくれたの？

近づこうとしてくれたの？

きみを騙して傷つけた、私みたいな最低の女のために――

「織原さん」

桃田くんは言う。

緊張で少し震えた唇で――だけど、決意を秘めた眼差しで。

「俺、やっぱり織原さんのことが好きです」

「――」

息を呑む。心の奥底にしまい込んだはずの感情が鎌首をもたげ、固く閉ざしたはずの蓋をぶち破ろうとしてきた。

「なに言つてるの……？　ちゃんと断つたでしょ？　この話は、もう終わつたよね？」

「はい。でも、諒めきれないんです」

「……バ、バカじゃないの？　付き合えるわけないじゃない……私達、年が一回りも違うんだよ？」

やめて。やめてよ、桃田くん。

そんなまつすぐな目で、私を見ないで。

これ以上見つめられたら、私、もう――

「……桃田くん。落ち着いて聞いてね」

私は言う。

感情と本能を抑えつけ、理性のみでの会話を心がける。

「きみは今、変なテンションになつて舞い上がるがつてるだけなの。そんな一過性の感情で私と付き合つたりなんかしたら、絶対後悔するから。きみは私のこと、同い年の女子高生だと思つたから好きになつただけ。本当の私は、27歳の社会人。もうすぐ30になるアラサーのおばさんなんだよ？」

続ける。胸の痛みに耐えながら。

「も、もし仮に付き合つたとしても……社会人と学生じゃ、うまくいきつこない。考えも価値観も全然違うから、それ違うだけになると思う」

痛い。胸が痛くて堪らない。想い人が私を好きだと言つてくれているのに、断る理由をあれこれ並べ立てるのは、自分で自分の心を切り刻んでいるのと同じだった。

でも、言わなきやならない。

相手の未来のために、言わなきやならない。

「お願い桃田くん。私なんかのために……青春を犠牲にしないで。一生に一度しかない高校生活なんだから、私なんかに振り回されちゃいけない。学生のうちは、学生らしい恋愛をした方

が絶対にいいから……」

「……そう、なんですね、たぶん」

桃田くんは力なく笑つ。

がいいって

「でしょ。だから——」

「でも、それで俺、目が覚めたんです。気がついたんです——俺には覚悟が足りなかつたって」

桃田くんは言つた。

「覚、悟……？」

「俺と織原さんと付き合つてことは……たぶん、あんまり普通のことじゃない。だから当然、反対する奴も出てくる。仲のいい友達ですら反対するんだから、見知らぬ他人からはどんな酷い偏見や誹謗中傷を受けるかもわからない……俺には、そんな『普通』を押し付けてくる世界から、あなたを守るだけの覚悟が足りなかつた」

そこまで言うと、桃田くんは立ち上がつた。

見つめる瞳には太陽みたいな熱があつて、私の心をジリジリと焦がす。

「織原さん——告白、やり直させてください」

「やり、直す……」

「こないだの告白が嘘つてわけじゃないけど……あれはやつぱり、JKの織原さんに言つた言葉でした。だから今度は27歳のあなたに——本当のあなたに、好きだと言わせてください」

その瞬間、だつた。

ボオ、と。

視線の先で、なにかが光つた。

柔らかな橙色の灯火が、闇の中で無数に浮かび上がる。

「あつ……バカつ。あいつら、まだ早いって……」

桃田くんが焦つた声でなにかを呟いたようだつたけれど、私は光から目が離せない。

淡い光は砂場の方から。

無数の輝きは平面ではなく、立体的に組み上がつていて。日が暮れて暗くなつていていたせいで今まで気がつかなかつたけれど、砂場になにかがある。

温かな輝きに照らし出された、少しひげトゲしたシリエットは——

「お、お城……？」

西洋の城、のように見える。

砂場の上に、こちんまりとしたお城が建つていて。高さは一メートルもないぐらいだろう。小さな小さな、砂でできたお城。

砂上の閣閣ならぬ、砂上の砂城。

「お城、のつもりです。友達にも手伝つてもらつて、織原さんが来る前に作りました。あの……あんま近づかないでくださいね。正直クオリティはアレで……このぐらいの距離から見るのが、たぶんベストなんで」

「綺麗……」

思わず感嘆の息が漏れた。橙色の光を発しているのは、電飾かなにかだらうか。砂でできた外壁のあちこちで小さな灯りが輝き、お城の窓から漏れ出した光が夜を彩つているかのようだつた。

闇夜を背景に、優しい光に包まれた砂のお城が浮かび上がる。

幻想的で、神秘的な光景だつた。

まるで夢のよう。  
闇夜を背景に、優しい光に包まれた砂のお城が浮かび上がる。

「よかつた、喜んでもらえたみたいで」

「……うん。すごい綺麗。でも、どうし——」

視線を砂のお城から桃田くんへと移した瞬間、驚いて言葉を失つてしまふ。

私が幻想的な光景に目を奪われていた隙に。

桃田くんは——いつの間にか花束を持っていた。

真っ赤な薔薇の花束を、少し照れくさそうに抱えている。

「わつ……え、ええ? な、なにこれなにこれ……? ど、どういう? ど?」

もうわけがわからん。

次から次へと驚きが押し寄せて、目が回つてしまいそう。

酔う。酔つ払う。

夢の世界に酔い潰れてしまう——

「織原さん、言つてたじやないですか。告白するならもつとムードを考えろって」

確かに言つた。けど。

「嘘……でしょ?」

——たとえばほら、遊園地を貸し切つて、お城の前で花束持つて現れるとかさ。

まさか。まさかまさか。

あんなのを真に受けたの?

苦し紛れに勢い任せで言つた、諦めさせるための口実だつたのに。

「……すみません。遊園地貸し切るような金はなくて……。今の俺には、こんな安上がりなお城が精一杯です」

申し訳なさうそうに桃田くんは言う。

「もしも織原さんが……社会に出たこともない15のガキなんか恋愛対象じゃないっていうなら、諦めます。金も地位もない俺なんかと付き合つて時間を無駄にしたくなつていうなら……悔しいけど、身を引きます」

でもつ、と桃田くんは一步踏み出す。

「俺の青春とか、俺の未来とか、そんなものを気にしてるなら——余計なお世話です」「よ、余計なお世話つて……私は、ただ、申し訳なくて……」

騙してしまつて、嘘をついてしまつて。

「俺の青春とか、俺の未来とか、そんなものを気にしてるなら、悪いと思ってるなら、責任とつてくだ

「つーか、もう手遅れですから」

まだ幼さが残る顔で、桃田くんはクシャツと目を細めて笑う。

さい

そして、桃田くんは膝を折る。

片膝をつき、ベンチに座る私の前に跪く。

ふわり、と。

薔薇の香りが鼻腔をくすぐつた。

ああ——ダメ。

もう、溺れてしまいそう。

つま先から頭の天辺まで全部、どっぷりと夢の世界に浸かってしまう。

燃え滾る太陽の熱にあぶられて、幾重にも纏つっていた理性の鎧が全て溶け落ちた。抑え込

んでいたはずの感情が、蓋をこじ開けて暴れ狂う。

心を——丸裸にされてしまう。

「俺は……王子様みたいに金も権力も持つてない。顔だって、大して美形でもない。でも、せめて心だけは、王子様であるよう努力します」

だから、と言つて。

桃田くんは跪いたまま花束を捧げる。

「どうか俺のお姫様になつてください」



姫。

ずっとこの名前が嫌いだった。

樂しんでいたのは五歳児ぐらいまで。小学校に入つてからは名前でからかわれることが多かつたし、地味で太つて陰キャ全開だった中学・高校時代は、「こんな私のどこが姫なんだか」と鏡を見るたびに自嘲した。

社会人になつてからは、仕事とゲームをやつてるだけのはずなのに時間が経つのが恐ろしく早く感じて、年を重ねるたびに名前コンプレックスが強くなつた。

お姫様になることを夢見る年はとつ々に卒業しているのに、姫という名前だけは一生背負つていかなきやならない。

自分の名前が嫌いだった。

それなのに。それなのに。それなのに――

「……するい」

唇から、言葉が漏れ出す。

「するい、するいよ、桃田くん……なんで、こんな……私なんかのために……こんなことされたら、私、もう……」

制御を失つた感情と共に、涙が溢れ出す。

最近、本当に泣きすぎ。

彼と出会つてからの一週間で、どれだけ涙を流したかわからない。

でも。

今溢れ出す涙は、今までのどの涙とも違つていた――

「……わかつてるの？」

私は、嗚咽の混じつた声で問う。

「私……27歳だよ？」

「知つてます」

「もう、おばさんだよ？」

「27歳はおばさんじゃないですよ」

「私……ほんと、全然、いい女じやないよ？ 女子力とか底辺だよ？ ファッションの流行には疎いし、今だつてコーディネートを面倒くさがつて、毎日スーツで出社してるぐらいだし。休みの日は……一日引きこもつてゲームしてるような女だよ？」

「問題ないです。一緒にゲームしましょう」

「料理だつてさ、桃田くんにあげたのは、すごく気合い入れて作つただけだからね？ 毎日あんな頑張つてるわけじやなくて、適当にカップラーメンで済ましたりすることも結構あるから……」

「そのぐらゐ気にしません」

「……桃田くん、よく私の……お、おっぱい見てるけどさ」

「んなつ、ぐ……あ、いや、その」

「……このおっぱいだつて、たぶん、もうすぐ垂れ始めちゃうよ?」

「だ、だつたら垂れるまで楽しします! 垂れたら垂れたで、それも楽ししますから!」

「……ぶつ。あはは。なにそれ」

吹き出すように笑つてしまつ。涙を拭う。

でも、いくら拭つても涙は止まらない。

この年になると、涙との付き合い方もわかってくる。ミスをして上司にしこたま怒られたと

き。大好きだったお爺ちゃんが亡くなつたとき。そして――15歳の子をフランキやいけない

とき。悲しくて悲しくて涙が止まらなくなるけど、涙や感情をそれなりに制御する心得はある

程度身についていた。

でも――知らない。

こんなとき、どうしたらしいのかわからない。

嬉しくて嬉しくて、幸せで幸せで涙が止まらないときは、どうしたらしいの?

どうしたらしいかわからなくて、もうどうにかなつてしまいそつ――

「……いい、の? ほんとにほんとに、私でいいの?」

私は言う。

「アラサーでも、彼女してくれますか?」

「はい!」

迷いない返答が、私の胸を撃ち抜いた。

ああ――もうダメだ。もう私を覆うものはないにもない。もう私を止めるものはないにもない。枷も鎧も蓋も、全部全部ドロドロに溶かされてしまった。

剥き出しの感情だけが私を突き動かす。

ゆつくりと立ち上がる。

勇気を振り絞つて一步踏み込んでくれた彼に応えるために、私も一步踏み出す。

少し身をかがめ、差し出された花束を手に取つた。

織原姫。

会社員。趣味はゲーム。

年は……27歳。

本日、生まれて初めて恋人ができた。

一回りも年下だけど、最高に格好いい、私の王子様。



「はあーん。結局織原と付き合うのかよ。けつ。つまんねえの」「不貞腐れないの。めでたいことなんだから、素直に祝福しなよ」

昼休みの空き教室。

不満そうなウラに窘めるように言つてから、カナは俺の方を見る。

「おめでとう、モモ。頑張ったね」

「おう」

「やれやれ。結局僕らの気遣いは、モモを止めるどころか火を点けただけだったのか。まあ、なんとなくこうなる気はしてたけどね」

呆れたように苦笑し、肩をすくめる。

「カナ、ウラ。ありがとう。全部お前らのおかげだよ」

心から礼を述べると、カナはにこやかに笑い、ウラは鼻を鳴らした。

「つたく……人をこき使いやがつてよ。いい年こいて砂遊びなんかさせやがつて」

「よく言うよ。お城作りを一番頑張つてたのは、ウラじゃないか。モモのためにすぐ一生懸命になつてさ」

「なつ……ち、ちげーよバカ！ 僕はただ、ああいう細かい作業が好きなだけだ！ 不器用な命になつてくれて、本当によかつた。

「お前らが見てられなかつただけだ！ ほ、ほんとだからな！」

砂のお城作りは、カナとウラにも相当手伝つてもらつた。ちなみに電飾は、家にあつたクリスマスツリー用のやつ。明るいとき見るとかなり残念なクオリティだつたけれど、夜の世界ではいい感じになつてくれて、本当によかつた。

「お前ら二人がいなかつたら、絶対上手くいかなかつたよ。まあ、ライトアップのタイミングはちょっとと早かつたけどな」

「しようがねーだろ。暗くて合図がよく見えなかつたんだよ」

「……でもねモモ。ライトアップは、あのタイミングでベストだつたと思うよ。モモが計画してたように、『俺があなたに魔法をかけてあげましょう』から始まるボエム独唱の後に指パツチンでライトアップじゃ……すげえスペつてたと思うマジか。

あれー。格好いいと思つたんだけどな。一生懸命力作のボエム考へてたのに。

「まあ、電飾のスイッチ入れた後、僕とウラはすぐ帰つたから、その後にモモがどんだけボエムミーなこと言つたかは知らないけどね」

「そ、うだつたのか？」

「うん。告白の結果がどうなろうと……その結果は、モモと織原さん、二人だけのものにするべきだと思ったから」

「けつ。ムービーでも撮つてやろうかと思ったけど、仕方ねえから自重してやつたぜ」

「……ほんと、サンキューな」

つくづく友人に恵まれてるな、俺は。

こいつらが友達で、本当によかつた。

「いやあ、それでも、なんか凄まじい大恋愛を脇から眺めてた気分だつたけど、モモと織原さんつて、まだ会つて二週間も経つてないんだよね」

カナが皮肉めいた笑みを浮かべて言う。

「まるでロミオとジュリエットだ。禁断の恋つてところもそつくりだしね」

「……うるせえ」

返す言葉もなかつた。

そうか。まだ、あの日から——電車でJKコスをした織原さんに遭遇してから、まだ二週間しか経つてなかつたのか。ずいぶんと長い間片思いをしていたような気分だつたけれど、俺達はまだ、会つてから一月も経つてない。

昔、ロミジュリが全体を通して二週間ちよいで終わる話だと知つたときは、なんだそりやと思つたけれど……やれやれ。俺はもう、ロミオとジュリエットはバカにできないな。

恋愛に過ごした時間は関係ないのだと、つくづく思い知つた。

「……ねえ。モモ」

ふと、カナが真面目な顔をして言う。

「やつとの思いで好きな人と付き合えて、今は舞い上がつてると思うけどさ……本当に大変なのは、たぶんこれからだよ」

「……」

「現実の恋愛なんて、エピローグの方が長いんだから」

「わかつてるよ」

交際がゴールというわけじゃない。

ラブコメみたいに二人が付き合つたら時間が飛んで結婚エンドで最終回、なんてこともないし、お伽噺みたいに『そして一人はいつまでも幸せに暮らしました』みたいな締めの文句でも終われない。

これからだ。

これから、全てが始まる。

15歳と27歳が付き合つのは、きっと普通のことじゃない。これから先、俺達にどんな困難が押し寄せるかは想像もつかない。覚悟はしたつもりだけど、俺のようなガキの覚悟なんて、もしかしたらなんの意味もないのかもしれない。でも。

それでも。

今だけは—— 素直に喜びたい。

ひたすらに浮かれていたい。

好きな人と両想いになれたという、そんな奇跡に酔い痴れて——

ふと、窓の外を見やる。

向こうには、織原さんが勤める会社がある。

今頃、あつちも昼食を食べてる頃だろうか。今日はどんなお弁当を作ったのだろう。それと

もまた、友人の雪さんと一緒にランチを楽しんだりしてたのだろうか。

そんなことを考えながら、俺はポケットからスマホを取り出し—— カバーを外した。



「織原さん……さつきからなに、ニヤニヤしてるんですか？」

会社の休憩スペースでお弁当を食べていたら、通りかかった小松さんから、ちょっと引いた  
ような顔で声をかけられた。

「えつ。わ、私、そんなニヤニヤしてたつ？」

「はい、かなり」

「そ、そ……」

「スマホのカバーをじつと見つめたりして……なにがそんなに面白いんですか？」

「べ、べべ、別になんでもないよつ！ ただ、いいカバーだなあ、と思つただけ」

我ながら諂ひ魔ま化かすのが下手過ぎだつた。小松さんは不思議そうな顔をしていたけれど、深く  
追求することではなく、飲み物を買って去つていった。

「はあ……」

深く溜息。しまつたなあ。もつとしつかりしなきや。

私と桃田くんの関係は、周囲には隠さなきやならない。15歳の高校生と付き合つてなんて  
ことが明明みになつたら、社会人としてどれだけの贅ぜいを買うかわからないし—— なにより、  
桃田くんにも迷惑をかけてしまう。

両想いになれたけれど、こつそりと隠れて付き合わなければならない。

浮かれて周囲に隙を見せてはいけない。

でもでも

「……えへへ」

さすがに付き合つた翌日じや、どうしようもなく浮かれてしまつ。朝から何度も、スマホのカ  
バーを外して眺めたかわからない。カバーの内側、スマホと接する部分には—— ブリクラが貼つてある。

桃田くんと、JKの格好をした私の、ツーショット。

私が落としていったのをずっと取つておいたくれたらしく、昨日、それをお互いのスマホケースの内側に貼つた。表からは見えない部分だけど、こつそりと隠れて『おそろい』のことを行つて感じる……ラブラブっぽくてすごくいい。すっごく幸せ。

……なんだか中学生みたいで恥ずかしいけど、でもしようがない。生まれて初めて恋をして、生まれて初めて彼氏ができた私は、恋愛偏差値なんて中学生ともにも変わらないのだから。

桃田薰くん。

一回りも年下の、私の彼氏。

カバー裏にプリクラを貼ることを提案したときに、

「私が学生の頃は、携帯の充電のカバー裏に彼氏のプリクラを貼つてる子が結構いたなあ。桃田くんはどうだった?」

「……すみません。俺、ガラケー使つたことなくて」

「……さ、最初からスマホ世代……!?

とか、そんな絶望を味わつてしまふぐらい、違う世界に住む私達だけど——それでも彼は、世界や常識の垣根を超えて、私の心を駆け抜けにした。

これから先、なにが起こるかはわからないけれど、今はただこの奇跡を囁み締めていたい。

ふと、窓の外を見やる。

向こうには、桃田くんが通う学校がある。

今日はどんな昼食を食べてるのでかな。友達のウラくんやカナくんと一緒に。今度私がお弁当を作つてあげようかな。

そんなことを考えながら、彼も私のことを考えててくれたら嬉しいな、とそう思った。